東京白楊だより

第27号
平成16.9.1
（2004年）

白楊ヶ丘同窓会東京支部　旧制函館中学校　函館中部高等学校

ホームページアドレス　http：//www.hotweb.or.jp/hakuyou/

新支部長就任ご挨拶

白楊ヶ丘同窓会東京支部長
金子　公彦
61期（昭和34年卒）

皆さん　お変わり無くお元気にお過ごしのことと拝察致します。

昨年十月二十五日開催の総会に於きまして、支部長を拝命いたしました。先輩諸氏が築き上げてこられた、長い歴史と伝統のあるこの白楊ヶ丘同窓会に傷を付けることなく、更なる発展を目指して頑張って参る所存であります。

ご存じのように、若年層の減少など時代の流れもあり、この種の同窓会は幾つかの問題を抱えているのが現状です。また、私一人では極めて微力であります。どうか、皆様方のご協力を戴き、会の活性化に向けて邁進致したく思っておりますので、ご支援ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。既に、新体制、新陣容により改革に着手し、ホームページの再構築、名簿の整備、親睦大会ならびに諸規程の見直し、企画運営委員会の設置など管理運営体制の再構築を進めております。まだその緒に着いたばかりではありますが、少しずつ成果も出始めております。新執行部は、次に掲げる基本方針で会の運営を目指していますので、各期の評議員はじめ皆様方のご協力を再度お願いし、ご挨拶とさせて戴きます。

①明るく楽しく、活力と魅力ある同窓会にしよう。②組織を再構築し、合理的運営を図ろう。③時代の流れに沿った対応と展開をしよう。④若年層を含む会員数並びに参加者の増強を図ろう。

「函中の使命は変わらず」

函館中部高等学校校長　富樫　一憲

一　ごあいさつ

白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、日頃から、本校で培われた「白楊魂」「楊燈魂」を遺憾なく発揮され、各界のリーダーとしてご活躍されるとともに、本校に対する暖かいご支援と激励を賜り、心より感謝申し上げます。

この四月に、宮下前校長先生の後任として登別高校から名門函館中部高校に赴任してまいりました。

私は、旭川育ちで、名寄・旭川・根室・札幌・北見・登別の各地の高校を回り、九校目としてこの函館市に初めて着任しました。

全力で目的の遂行に当たる所存ですので今後ともよろしくお願い申し上げます。

二　長い歴史と伝統の中部高校

長い歴史と伝統に支えられた函館中部高校の理解を深めるため、多くの方々のお話に耳を傾け、百周年記念誌を繙き、同窓会だよりに目を通すなどしております。

同窓生の皆様の各界でのご活躍を知り、スケールの大きさを再認識するとともに、私と出身校は異なっても、共に生きた時代の共通点に懐かしさを感じております。

そして、同窓生の皆さんのエピソードや回想を読んで感じることは、函中で学んだ幸せ、母校への誇り、世代を越えた連帯感、後輩への熱きエールです。

三　文武両道に励む生徒の現況

文武両道を目指す本校では、部活動加入率は90％に達し、進路目標達成への努力とあわせて、体育系・文化系の両面で、毎日活発な部活動が展開されております。

苦労すること、汗を流すことを好まない風潮の中で、これは驚異的な数字です。七月一六日現在で全道出場は、体育系部ではバスケットボール部、羽球部、卓球部、剣道部、テニス部、弓道部、及び文化系部では放送局です。そして全国出場権を獲得した部は放送局、囲碁将棋部となっています。

この頑張りと勢いは、必ずや進路実績にもつながるものと確信しております。また、そうしなければなりません。

四　大変活発なＰＴＡ活動

本校の特徴の一つは、ＰＴＡ活動が大変活発なことです。中でも「母の会」は、結成されてから五〇年以上経過し、独自の研修活動や学校行事への多大な貢献などが高く評価され、全道高Ｐ連・全国高Ｐ連から表彰を受けたのは記憶に新しいところです。

この活発な本校ＰＴＡを今後も大切にしていかなければならないと思っています。

五　更なる発展を目指し

本校は、昨年度から三年間、文部科学省の「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」の研究指定校となりました。

これからの時代に必要な「すべての生徒が英語による日常会話ができる実践的なコミュニケーション能力」の育成を目指し、系統的な指導法の研究を始めています。

指定校になったことは、全国的にも高い評価を受け、勢いのある学校として教育関係者の注目をあびております。これを契機に、他の教育活動の一層の充実を図り、この状況が上滑りしないよう、名実ともに充実した教育活動を展開できるよう決意を深めています。

六　「白楊魂」の精神

本校の校是「白楊魂」に流れている「自主自律」「自由闊達」「質実剛健」「堅忍不抜」「不撓不屈」の精神を、これからも在校生にしっかりと引き継ぎ、二一世紀のリーダーとして豊かな心を持ち、たくましく生きる函中健児を育成すべく、教職員一同英知を結集して教育活動に取り組みます。

白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、本校の更なる発展のため、今後ともご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

野球と白楊魂

過去三年前……

渡島の一角に覇をとなへ白楊魂を以てほこりとしてゐた當時は白楊ヶ丘健児と自らも任じ人も稱した。

連戦連勝といふ風で勝利を唱ふ應援歌は絶えず緑なす白楊の梢に響いてゐたものだ。

そして自分等は赤き夕陽が校窓を染むる頃まで居残って明日の勝利を心静かに額垂れて祈ったりした。

全く人々の心は野球熱に燃えたってゐたといってよい。

春から秋の終わりにかけ廣野の奥の露の間にはノックのひゞきがたえなかった。

所謂ゴールドンタイムとでもいふんだらう。

しかし盛者必滅の理にそむかず此の全盛期もやがては退散の期運に遇してきた。

自分は此先榮あるわが野球界の歴史をかへり見るたびに轉た懐舊（かいきゅう）の情けにせまられ此事より推して以て白楊ヶ魂なるものが健児の心に今如何に育まれつゝあるかを疑はずにはをられない。

自分は一寸當局者の反省をうながす次第である。

（『学叢』二十六号、大正六年発行より）

白楊ヶ丘同窓会東京支部
第27回親睦大会報告

心のオアシス東京支部を活力ある集いに！“ポプラの下に集いし我ら！2003年はこだて白楊ケ丘物語！”をテーマに、白楊ケ丘同窓会東京支部の平成15年度「第27回親睦大会」が、10月25日（土）午後６時より、東京・港区北青山の「青山ダイヤモンドホール」で、来賓及び同窓生など190人が参加して行われた。

理事 菅原　大作
65期（昭和38年卒）

盛会だった第27回親睦大会

今回は、母校の歴史と函館の街の盛衰を盛り込んだ二〇〇三年の函館のホットな映像を25分間のビデオテープにまとめた映画監督の金谷稔氏（昭和27年・54期卒業）の作品が、開会に先立って会場正面の左右に設置された二つの大きなスクリーンで上映された。

ビデオは、「二〇〇三年はこだて白楊ケ丘物語」のタイトルで、9月に函館・末広町の五島軒で行われた白楊ケ丘同窓会本部総会の校歌斉唱のシーンに始まる。そして、今年の函館の最も明るい話題の一つ、新函館駅を紹介。次いで、一八九五（明治28）年4月1日に、元町に函館尋常中学校として設けられた母校の最初の校舎を紹介。一八九九年には私立函館中学校、一九〇一年には北海道庁立函館中学校へと変遷。さらに、一九〇六年に、現在地の時任町に移転。この時、学校の周囲にはポプラはなかったが、一九一一（明治44）年にポプラが植えられ、「ポプラが丘」となったと解説。

一九一四（大正3）年に、創立20周年記念式が行われると同時に、土井晩翠作詞、岡野貞一作曲の校歌（現同窓会歌）と校旗が制定された。

一九四六（昭和21）年の野球部とバスケット部の全国大会での活躍を紹介。一九四八年3月に旧制中学校が閉幕し、同4月より新学制の実施に伴い北海道立函館高等学校として発足。一九五〇年4月の市内公立普通科高等学校の統廃合に伴い、北海道函館中部高等学校として再発足し、男女共学制が実施され、現在に至った。

一九五四（昭和29）年9月26日、台風15号が函館を直撃し、洞爺丸ほか4隻の青函連絡船が沈没。多くの犠牲者を出した。この台風で、一九一一年に校舎の周りに植えられていたポプラの大木の大部分が折れた。そこで、周囲の家屋への影響を及ぼすことが危惧されたため、残ったポプラも切られた。

一九五六（昭和31）年には、3代目の校舎が完成。

一九五八（昭和33）年に、函館山ロープウェイが完成。また、この年、函館港開港一〇〇周年の記念行事も行われた。一九六〇（昭和35）年には函館空港が完成し、翌年運航が開始された。

一九七七（昭和52）年、白楊ケ丘同窓会東京支部が発足し、支部設立第1回大会が、平河町のマツヤサロンで開催され、三六八人が参加した。

一九八四（昭和59）年5月31日、創立90周年を記念して、新たに9本のポプラが校庭に植えられる。

一九八八（昭和63）年、青函トンネルが完成して青函連絡船が廃止される。

一九九三（平成5）年12月、4代目となる現校舎が完成。落成記念式典が行われる。

一九九五（平成7）年10月14日、創立一〇〇周年記念式典が函館市民会館で開催される。

同窓には、著名人も多く、評論家の亀井勝一郎氏、作家の久生十蘭氏、長谷川海太郎氏、今日出海氏、宇江佐真理氏、エッセイストの渡辺紳一郎氏、将棋の二上達也氏、プロ野球の沼沢康一郎氏、柔道の佐藤宣践氏などがおられるが、これらの方々を紹介。

ビデオでは、函館の名所や観光スポットを綺麗な映像表現で紹介する一方、町並みに虫食い状態で点在する空き地に象徴される函館

の街の元気のなさに注目。同窓生として、郷里・函館に応援できることはないかと提言している。

ビデオ制作を担当した金谷氏は、「撮影のため何回か、東京・函館間を往復したが、函館の街全体に活気がなく、大変残念に思った。函館の盛衰の模様を紹介すると同時に、母校の歴史をたどることで、函館に寄せる熱い応援歌にしたいと考えた」と述べている。

ビデオ上映の終了後、午後6時30分より、懇親パーティが開宴された。

司会は、69期・吉田雄治氏が担当。最初に、旧制・函館中学校校歌（同窓会歌）「玄冥の北の一道」を、69期・米木かをりさんのピアノ伴奏で全員で合唱し、雰囲気を盛り上げた。

続いて、支部長の54期・杉田博子さんが「同窓生並びに来賓の方々に多数ご参加いただきありがとうございました。今宵は、美味しい料理とお酒を楽しみながら、同郷同士で時間の許す限りご歓談いただきたい」とあいさつ。

この後、総務担当副支部長の菅原が「今大会をもって、杉田支部長が任期満了で退任される。後任には、理事会で61期の金子公彦氏を選任した。ご承認いただきたい」と報告。満場一致で承認された。そして、杉田支部長から金子新支部長へのバトンタッチが行われた。

金谷　稔氏（54期）

金子新支部長　　杉田前支部長

金子新支部長は、「諸先輩がおられる中ご指名があり、僭越だが、支部長の大任を引き受けることになった。長い歴史と伝統を持つ白楊ケ丘同窓会東京支部が、今日ここまで立派に成長してきたのは、多くの先輩や役員、各期評議員、さらに本日ご参加の皆さん方のご努力によるものと、敬服すると同時に感謝したい。伝統ある同窓会を先輩の名を汚すことなく、明るく、楽しく、活力ある、その上皆さんにとって役立つ会にしたい。しかしながら、私一人では微力であり、皆さん方の一層のご協力とご支援をお願いしたい。

なお、本日ご参加の皆様は、すべて何らかの形で函館に関係されており、等しく函館を含めた道南地区の発展と活性化を願っておられると思う。白楊ケ丘同窓会東京支部としても『あすの道南を拓く会』や『道南会』などと協力して邁進したい」とあいさつした。

この後、来賓として出席された宮下勤函館中部高等学校長、山内隆陽白楊ケ丘同窓会長、鈴木進同幹事長、岡本大三郎同関西支部長、荒川伸夫同札幌副支部長、酒井哲美函館市東京事務所長、厚谷論同副所長、新谷義克函館西高等学校つつじケ丘同窓会長、渡部久二男同副会長、小嶋俊昭同代表幹事、郷内繁同常任幹事、佐藤雅英同実行幹事、恩田美智子同会員、新山春一函館東高等学校・関東地区青雲同窓会副会長、辻政良・川口嵩子同常任幹事、田村良人同幹事長、薬袋泰東京函商同窓会長、太田三和子同副会長、島田瑞子遺愛同窓会東京支部副支部長、田代沙智子白百合学園東京支部長、板垣寿見子同支部員をそれぞれ紹介。

来賓を代表して、山内同窓会長が「東京の同窓会に来ると、熱気あふれる雰囲気に圧倒され、刺激を受ける。今回もビデオ映像を拝見して、制作を担当された54期の熱意を感じると同時に、これが単に中部高校に限らず、函館へのエールとして受け止めさせていただいた。

母校は、2年後に創立一一〇周年を迎えるが、同窓会としても学校と協力しながら節目の年へ向けて準備を進めている。また、5年ごとに発行している名簿の作業にもご協力いただきたい」とあいさつした。

宮下校長は、「2年半前に赴任したが、同窓会には今回初めて参加できた。最近の学校の状況については、校風である自由闊達、文武両道に基づく文武両面の活躍として、バスケットボール部は地区大会で準優勝し全道大会へ進んだ。野球部は、26年振りに札幌円山球場で行われた全道大会に出場し、1回戦不戦勝、2回戦では滝川西高校に逆転勝ちした。全道大会での勝利は34年振りとのこと。ブラスバンド部の生徒と一緒に応援したが、実に盛り上がった一日だった（翌日の3回戦で敗退）。

一方、今、文部科学省では、学力向上のために、フロンティアハイスクール、スーパーハイスクール対策を打ち出したが、本校はスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定を受けて、卒業までに英語によるコミュニケーション能力を身に着ける3年間の事業がスタートした。

なお、平成17年の創立一一〇周年に向けて、今年中に協賛会を立ち上げ、来年1年間をかけて準備し、再来年10月に記念式典と祝賀会を行う予定。その時には多くの皆さんのご参加をお願いしたい」とあいさつした。

この後、二上達也日本将棋連盟顧問のご発声で乾杯し、懇親パーティに移った。

二上達也同窓会顧問

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所から寄贈を受けた函館の夜景や旧倉庫街、元町界隈のポスターが多数貼られ、雰囲気を盛り上げた。

一年振りあるいは久し振りに顔を会わせた会員の間では、先輩、後輩の隔てなく会話が弾み、随所で懐かしい函館弁が聞かれた。また、記念写真撮影のストロボが光るなど、会場内は終始和やかな雰囲気に包まれていた。

なお、アトラクションでは、尺八とシンセサイザーを複合させた従来にない演奏方法の岳人山（がくじんざん）のライブが行われ、和洋の音の競演が会場を一層盛り上げた。

大会の最後に、校歌「火柱のはためく峰も」を全員で合唱。次回の再会を約束して午後8時30分過ぎ盛大裡に終了、散会した。

第27回・東京支部親睦大会出席者一覧　（平成15年10月25日・青山ダイヤモンドホール）

昭和8年卒（第35期）佐藤　洋・佐々木孝允
昭和13年卒（第40期）相馬正樹
昭和16年卒（第43期）井筒吉彦・内海　孝・梅崎総一
神山茂郎・続　豊
昭和18年卒（第45期）池上謹之助・小笠原敏雄
昭和20年卒（第47期）堀田善和
昭和20年卒（第48期）篠田作衛・渡辺丞二
昭和23・24年卒（第51期）小野寺吉彦・柴田隆一
早坂茂三・三國比左男
山田　隆
昭和25年卒（第52期）井上　稔・菊池昶史・小泉龍彦
瀬田松吉昭・長島　康
福津達男・二上達也・安岡裕三
昭和26年卒（第53期）佐々木順一・多和田裕
加藤久枝
昭和27年卒（第54期）遠藤　宏・金谷　稔
小宮山恵三郎・佐藤正郎
澤口幹男・高橋邦年・富田洋一
渡辺　昌・杉田博子
保田恵美子
昭和21年入学（第54期）戸根一也・納代鉄也
昭和28年卒（第55期）北原　徹
昭和29年卒（第56期）浅岡　勤・若杉康孝
昭和30年卒（第57期）荒川　博・鵜島克孝
久保田晶巳・椎名三五
末松　一・吉田精吾・隈井　薫
鈴木幸子・松川澄子
昭和31年卒（第58期）佐藤　健
昭和32年卒（第59期）浅間邦彦・小林重行・真船　昭
山崎友宏・岸本文子
昭和33年卒（第60期）上平慶一・北原耕太郎
白戸寿男・越田正義・石渡悦子
松田栄美子・宮川満子
山根信子
昭和34年卒（第61期）相澤貞俊・岡本　興・金子公彦
菊池紀邦・佐々木住明
正津禎男・橋本正夫・畑中万弘
藤田美穂子・堀内恵子
三上和子・水嶌紀子
昭和35年卒（第62期）荒井　浩・石原雄一郎
小松康宏・辻　明・松本幸平
昭和36年卒（第63期）越後谷宏・小林嘉則

昭和37年卒（第64期）石崎篤子・土橋道子・福本元子
大越陸夫・大原淳一・岡本　馨
佐藤智樹・鈴木三則・関　英夫
徳田定勝・山崎栄治・片岡洋子
菅原大作・千葉恵寿
昭和38年卒（第65期）小野　豊・石塚昌子
昭和39年卒（第66期）加賀幸彦・相馬研二・花海吉夫
昭和40年卒（第67期）松田幹夫・菅野蓉子
昭和41年卒（第68期）池端幸夫・木戸正文・及能誠一
白崎淳一郎・大河原綾子
昭和42年卒（第69期）梅田五郎・高木　隆・吉田雄治
安藤牧子・梅田やよい
松川宏子・松坂きみえ
米木かをり
昭和43年卒（第70期）鎌田博介・佐藤勝義
斎藤七穂・斎藤真理子
昭和44年卒（第71期）及川愛二・加納元雄
斎藤太七郎・佐藤元嗣
高野　泉・武内　隆・中泉光一
中村興治・成田秀信・山本雅博
朝日恵子・市澤仁美
島田夕起子
昭和45年卒（第72期）長内仁巳・加藤哲夫・神垣善一
菊池佳裕・小林繁治・笹川浩史
佐藤直樹・丹羽　修・村上誠一
渡部敏雄・佐野香苗
昭和46年卒（第73期）山田　朗
昭和48年卒（第75期）祐川伊佐久・吉川忠幸
桑原洋子
昭和49年卒（第76期）白川正広・町原秀臣
昭和50年卒（第77期）大鹿栄樹・若生　直
昭和51年卒（第78期）垣坂　清・櫻井裕晃・島津路郎
斯波宇司・長澤一徳・松田　司
宮崎恒春・山平匡人
岡部あさ子・吉崎加代子
昭和52年卒（第79期）西田勢津子・藤浪葉子
昭和53年卒（第80期）瓜谷暢樹・片瀬裕巳・西谷尚久
山本直樹
昭和54年卒（第81期）松永　久
昭和57年卒（第84期）江原みちな
昭和58年卒（第85期）岡川　直
昭和61年卒（第88期）酒井道彦

参加者総数　217人

特集

洞爺丸台風から半世紀・50年目を迎えて

青函連絡船・洞爺丸

50年目を迎える洞爺丸事件

道南の災害史上、忘れることのできない洞爺丸台風から半世紀を迎える。海難事故としては、氷山に衝突して沈没したイギリスの豪華客船・タイタニック号に次ぐ、世界第二の大惨事。上磯町七重浜にある殉難者慰霊碑前で洞爺丸台風海難50年目慰霊法要が行われるのを前に、いま一度、当時の状況を振り返る。

その日

出港わずか20分後大しけ

「木の葉のように揺れ、今まで体験したことのない大しけでした」―。二等航海士の山田友二（29）は、当時の船の様子をこう表現する。

1954（昭和29）年9月26日。台風15号の動向をうかがっていた青函連絡船「洞爺丸」は、予定より4時間遅れの午後6時39分、青森へ向けて函館の桟橋を出港した。海上の状況が急変したのは20分後。強い風と波が船を襲った。洞爺丸は、続航中止を決め、午後7時1分、函館港外に錨（いかり）を下ろし、しけが収まるのを待った。

山田はこの時、船内のブリッジにいた。激しい横揺れと縦揺れに加え、船は錨を中心に振り子のように右へ左へと180度近く揺さぶられた。「何かにつかまっていなければ立っていられなかった」

台風15号はこの時、北海道南西海上でさらに発達を続ける一方、進行速度を落としていた。道南一帯では5時間あまりにわたり暴風雨が続いた。

洞爺丸は七重浜へと押し流され、沖合に座礁。「砂浜に乗り上げたからもう大丈夫」。ブリッジ内の船員誰もがこう思った直後、船体は急激に傾き、午後10時43分、転覆―。

船がぐぐっと右へ傾斜した時、山田は船体左の窓枠につかまった。船が横転した際、いち早くブリッジの外に出ることができたが、船外は荒れ狂う暗黒の海。すぐさま波にさらわれ、海に投げ出された。

激しい波が次から次へと襲い掛かる。海水をガブガブ飲み、頭はパニック状態。自力ではどうすることもできず、波にもまれながらも奇跡的に七重浜に打ち上げられた。小さな明かりを頼りに暗い砂浜を歩き、民家に助けを求めた。生存者や遺体が続々、この浜へ打ち上げられてきたのは、この直後だった。

「浜は真っ暗闇で状況はよく分からなかった。どうも自分が最初に打ち上げられたようでした。最後の力を振り絞り、民家に助けを求めました」と、山田は振り返る。

洞爺丸の乗員・乗客1334人のうち、1175人が亡くなった。洞爺丸のほか、青函貨物船の第十一青函丸、日高丸、北見丸、十勝丸も函館港内で沈没。のちに「洞爺丸台風」と呼ばれる台風15号は、船5隻の乗員・乗客1430人もの命を奪った。

翌日

海辺に転がる死体の山

洞爺丸転覆後、上磯町の七重浜には遺体が続々と打ち上げられた。泣き叫ぶ者、悲痛な表情で海を見つめる者、黙って手を合わせる者…。多くの遺族が浜につめかけた。

「兄さん、いたの！洞爺丸が大変ですよ」。斯波正夫（29）は9月27日早朝、近所の人にたたき起こされた。前日昼まで、無線通信士として洞爺丸に乗船。七重浜にある国鉄宿舎で寝ていた。

斯波はすぐさま、浜へと走った。海辺には、ゴロゴロと死体が転がっている。「大変なことになった…」。全身に震えが走った。沖合には、洞爺丸が無惨な姿で横たわっていた。

海上では、潜水夫が船内から遺体を引き揚げていた。斯波は遺体収容作業に加わり、運ばれてくる遺体を見て、「これは○○さん」と係の人に教える役を務めた。「悲しみにくれる暇などなかった」

新聞各紙は連日、一面トップ扱いで事故の惨事を伝えた。「夫が私を呼ぶ夢をみました」「家で二十六日の夜障子にサチ子の影がうつった気がしました、そのとき死んだのですね」「子供のことを考えると本当にわたしたちも夫についていきたくなります」。10月2日の函館新聞（当時）には、肉親を亡くした遺族の心の叫びが記されている。

第十一青函丸も沈没

吉田幸（36）のもとに青函貨物船第十一青函丸沈没の報が入ったのは、27日朝のことだった。夫の虎夫（44）が乗船していた。最初は「何が何だか分からなかった」が、とにかく七重浜に向かった。

第十一青函丸には、乗員・乗客266人がいたが、全員が帰らぬ人となった。遺体が発見されず「行方不明」とされた人も多かった。「随分探したけど見つからなかった。最初はどこかで生きていると思っていましたが、11月に葬式を出しました」

吉田のもとには、4人の子供が残った。末っ子はまだ小学校1年生。無我夢中で子供たちを育ててきたが、9月26日に慰霊碑前に足を運ぶことは欠かさなかった。どんなに悔やんでも悲しんでも夫は戻ってこない。「二度と事故が起きないように」。吉田はこの半世紀、願い続けている。

日本中を震撼させた洞爺丸台風のあと、青函トンネル建設の話がにわかに活気付いた。事故から34年後の1988年、青函トンネルが開通し、青函連絡船は歴史に幕を閉じた。事故の教訓から、気象予報や造船などの技術は進歩を遂げた。だが、たとえ津軽海峡の主役が代わっても、半世紀もの時が経過しても、事故の悲しみは癒えることがない。

（文中敬称略、年齢は当時のもの。函館新聞・早坂直美記者取材記事より抜粋）

水底に貝がら鳴り
水底に貝がらふるえ
　波の日元気に海峡を渡り
　遂にかえらない
　　幾たりかの友だち
潮流に貝がら流れ
潮流に貝がら叫び
　暗黒の水底からじっと
　故里を見守る数多くの瞳
海底に貝がらうもれ
海底に貝がらむせび
　あゝこれはそも
　唯人の骨片であろうか

（北見丸事務掛として遭難した故亀谷利博氏の遺稿詩）

「洞爺丸海難事故」の回想

昭和27年卒・54期　種田　忠夫

昭和29年9月26日深夜に発生した洞爺丸の沈没によって、私は両親・姉・妹の四人を失った。それだけに、あの海難事故は半世紀を経た今も尚、鮮烈な記憶として私の脳裏に残っている。

当時北大生だった私は、札幌市内の下宿で中部高校出身の友人達と共同生活を送っていた。

9月26日は、午後から猛烈な風雨が札幌をも襲い、恐ろしい程だった。

翌27日は台風一過、朝から抜けるような青空だったが、午前7時からのNHKラジオで、連絡船の遭難と多数の犠牲者が出ているとのニュースが繰り返し放送されていた。

あの頃、私の一家は生活の拠点を函館から東京へ移すため引っ越しを計画していた。

「もしや…!?」と胸騒ぎを憶えた私は、早速函館の家族に連絡を取ろうとしたが、電話線が寸断されていて連絡の方法が無い。

やむなく北海道新聞本社へ行き、乗船者名簿の閲覧に狂奔した。そして夕刻、家族四名の名を発見。直ちに函館行きの夜行列車に乗り込んだ私だったが、強い不安に襲われて〝心ここにあらず〟といった不安定な気分だったことを今でも折に触れて思い出す。

28日朝函館着。既に収容されていた、母・姉・妹の遺体と親戚の家で対面したが、父はいまだ発見されていなかったので七重浜へ直行。

それから3日間、私は七重浜と慰霊堂の間を行ったり来たりしながら、無我夢中で父の遺体を探し続けた。

10月1日、漸く父の遺体を発見し、混乱の中で多くの参列者の来駕を頂き、葬儀を行うことが出来た。

七重浜に打ち上げられた数百の無残な遺体…

慰霊堂の中の悪臭と大混雑…

茶毘が間に合わず、七重浜に古枕木を並べて石油をかけ、その上で多くの遺体を直ちに焼却処理したが、その際の猛烈な黒煙・悪臭・遺族の悲嘆…

一つ一つが今でも鮮やかに思い出される。

翌昭和30年、高松港で宇高連絡船紫雲丸が沈没。300名を越える修学旅行中の中学生が犠牲となる痛ましい惨事となった。

洞爺丸事故と併せ、この二つの事件が現在の青函トンネル・瀬戸大橋建設促進の契機となった事は記憶に新しい。

今も大型船舶が密集する日本近海だが、あの忌まわしい洞爺丸事故から早くも五十年を迎える今こそ、故寺田寅彦博士の名言『災害は忘れた頃にやってくる』を再び心せねばなるまい。

僚船の命運　第十一青函丸・北見丸・日高丸・十勝丸

二十七日午前零時五十七分頃から、桟橋の運航指令室は全連絡船の所在を確かめ始めた。青森岸壁に羊蹄丸と渡島丸が着岸テケミ、函館港内に石狩丸、第六青函丸、第八青函丸が投錨テケミしていた。港外に出た船のうち、大雪丸と第十二青函丸が応答し、所在と無事を報告してきた。しかし、第十一青函丸、十勝丸、日高丸、北見丸からは、何回も無線で呼びかけたにもかかわらず、応答がなかった。

◆第十一青函丸

第十一青函丸は、二十六日、進駐軍専用便船として、定時刻午後一時二十分に、函館港第二岸壁を出港した。しかし、函館山に併行となった頃、渡島丸からの報告を受信して、海峡がすでに大時化となっているのを知り、テケミ（天候警戒運航見合わせ）を決断、二岸に戻り、進駐軍を下船させた後、沖出しした。午後四時二十五分、港外の、防波堤灯台より二百四十五度二浬の地点に投錨した。午後七時五十分頃、桟橋無線局と連絡中に、音信が途絶した。五、六分の後、再び無線連絡をしてきた。「停電につき後で（電報を）受ける」。これが最後の通信となる。

第十一青函丸の通信途絶に気をとめたものはなかった。翌日、収容された遺体の中に、第十一青函丸乗組員が発見された。そこで初めて、第十一青函丸の遭難を確認する。しかも、遺体の腕時計から、午後八時頃に沈没したことがわかり、二重の衝撃に打ちのめされる。午後七時五十七分の「停電につき後で（電報を）受ける」送信中か、送信直後に、突如転覆したと推定された。乗組員九十名は、船長以下全員が死亡してしまい、全く様子がわかっていない。さらに、遺体の発見された者が二十五名、行方不明が六十五名で、五隻の遭難船中、最も行方不明者が多い。

午後八時頃というのは、南西の風が最も強かった時である。着岸中の石狩丸が繋留索を切られて沖に流され、イタリア船アーネスト号が繋留ブイの鎖を切られて港内に流され、洞爺丸が港外で走錨を始めたのと同時刻だった。

十勝丸で遭難し、救助された三浦令司火手の目撃談だけが、唯一、第十一青函丸の最期を知る手がかりとなっている。彼は、ボーイ長（各部の見習職員）と呼ばれる新米火手であった。まだ実務には参加できず、散乱した部屋の片付けを命ぜられて居室に戻り、偶然、舷窓から見たのだった。激しいピッチングをしているので、船が進んでいるように見えた。船内の電灯が消えた。まもなく、船が棒立ちになった。船首が空中高く、左舷に捩じれた形で立ち上がった。そのまま、船尾のほうから捩じれるように沈んでいった。ゆっくり入っていった。沈む時の波の凄さは、たとえようがなかった。

第十一青函丸の船体は、三つに折れている。その一つである船首部分が、三角錐の形のまま海面より赤首をもたげて漂流し、各船はこれを避けるため、死闘を演じることになる。

◆北見丸

北見丸は、二十六日午後三時十七分、第九四便として定時より早く有川岸壁を離れ、テケミのため同三時三十分、港外に投錨した。午後八時頃、猛烈な風のため、走錨して圧流され始める。辻垣正夫船長は、安全な場所で漂泊する踟躕（ちちゅう）航法を採ることにし、アンカーの巻き揚げを命じた。第十一青函丸、洞爺丸、日高丸、十勝丸が錨泊のまま苦闘したのに対し、北見丸は早くから抜錨して沖に向かっていった。

船尾開口からの浸水、貨車甲板に滞溜した海水が機関室と缶室に浸水したのは他船と同様だったが、それでも、午後九時頃、葛登支岬付近に来た時、状況はかなり回復した。午後九時二十分頃、船橋から機関室に対して電話があり、「トリミングを使用して船の傾斜を直したい」と言ってきた。

青函連絡船のトリミングは、貨車の積み込み、積み下ろしの時に行う。たとえば、左舷に貨車が押し込まれてくると、その重量で船が左舷に傾く。そのままでは、船尾と陸上レールを繋いでいる可動橋が船尾から外れて、貨車が脱線してしまう。船側では、貨車の押し込みに合わせて、トリミング用のポンプを使い、左舷水漕から海水を排水して、左舷を浮き上がらせ、傾きを補正する。それでも不足なら、右舷水漕に海水を注入して、さらに補正する。このトリミングポンプの操作によって、貨車の出し入れにかかわらず、船を常に水平に保つことができる。日常このように使用しているトリミングポンプを、今、十度ほどの傾斜を補正するために使いたいということだった。

船橋士官は全員死亡してしまい、その模様はわからない。しかし、ピッチング、ローリングは異常なものだったと想像できる。それが、ある安定状態になったため、ここで船の傾斜を直しておきたいという余裕が生まれた。

しかし、トリミングの操作はうまくいかず逆に傾斜が三十度を上回り、排水に懸命の努力を重ねたが、ほぼ一時間後、午後十時二十分頃右舷に横転し、沈没した。洞爺丸より早く、第十一青函丸に継ぐ二番目の沈没であった。船長以下、七十名が殉職し、救助された

のはわずか六名だった。生存者と遺体の一部は函館山の裏側に漂着したが、二十九名の行方不明者の多くは、沈没位置から津軽海峡に流出したと推測される。

遭難位置を知らせることができないほどの瞬時の沈没だった。北見丸の船体発見は、この日から二十一日後、補助汽船第八鉄栄丸の測深器にその船影が浮かび上がる十月十六日まで、待たねばならなかった。

◆日高丸

三一便日高丸は、石狩丸の後続船として、石狩丸の二十分後、午前十一時二十分、青森を定時に出港し、荒天のため五十分遅れで函館港外に到着した。午後四時三十三分、港内に入り、投錨しテケミに入った。

その後、日高丸からの連絡は全くなかったが、午後十一時二十分、「本船危険救助手配乞う」を打電し、十二分後、午後十一時三十二分、「SOS」を発信する。同四十分、再び「SOS」を発信の途中、通信が途絶えた。船橋で舵輪を握っていた秋場大秀操舵手が生存し、事態の生々しい展開が伝えられた。

午後七時五十分前後に、当直以外の操舵手は暫く休養するように指示が出た。この指示は、後で何名かの命を救うことになる。貴重な指示であった。船橋の士官は、青森出港以来七時間から十時間に及ぶ連続勤務で、この後、転覆し海に投げ出される頃にはすでに疲労困憊し、全員が死亡した。

前方に船の灯りが見える。次第に近づいてくる。十勝丸だった。

姫野船長は、舵が有効に利かず横腹にばかり風波を受ける状態では、十勝丸をかわしての走航は不可能と判断し「仕方がない。投錨だ」と叫んだ。

突然、「左舷に何かあるぞ」と、船長が叫ぶ。操舵手が機雷発見用の投光器を向けた。船橋の屋上から太い光りが暗夜に走る。左舷の前方に赤い船首の沈船（第十一青函丸）がいた。流れて来る。このままでは、沈船に乗り上げてしまう。

機関室から「浸水甚だし」と報告が来た。風は四十から四十五メートル、依然として止む気配がない。「このままでは船が風に立たない。船を走らせる」、船長はそう言い、「アンカーを切れ」と命令した。アンカーチェーンが錨鎖庫からもの凄い音を立て火花を散らし、海に消え去った。すでに錨を失ったその揺れ方は、この直後の悲劇を予感させる揺れ方である。四十秒、五十秒、神に念じる思いで回転計を見つめる。動かない。異常な衝撃がきて、右舷に四十五度ばかり急激に傾いた。「もう駄目だな」、船長は呟き、「退船」と言った。秋葉操舵手が退船を示す汽笛のレバーを、連続して力一杯引いた。汽笛はかすかな音を立てたばかりで、長年聞き慣れた音にはならなかった。杉本善三郎通信長が「SOSですね」と、無線室に戻っていった。

長い時間、船首甲板で指揮を取っていた宮川一等運転士が、救命具を着けないでいた渡辺修一水手に、自分の救命具を外して渡した。

沈没して漂流した第11青函丸の船首

一人、二人、波に取られて消えてゆく。救命具を着けない宮川一等運転士が、船橋へのタラップに掴まり、「最後まで頑張るんだぞ」と手を上げた時、日高丸は横転した。午後十一時四十分頃であった。

船長以下五十六名が殉職し、二十名が救助された。殉職者のなかに宮川一等運転士がおり、救命具をもらった渡辺水手は生存した。

◆十勝丸

貨物船十勝丸は、午後二時二十分、五三便として青森を出港した。すでに函館側では、貨物船第六青函丸、貨物船第十一青函丸がテケミをしていた。荒天によるテケミが予想される時は、ほぼ同時刻に他方の港を出る相手船がいつテケミをするか、船長は強い関心を持っている。

十勝丸に続いて出航する予定の客船羊蹄丸がテケミをして、青森岸壁を離れなかった。この羊蹄丸と前後して函館を出る予定の洞爺丸も、出航遅延の果てテケミを決定したため、すべての連絡船がテケミしているなかを、十勝丸一隻が走ってきたのだった。

十勝丸は定時より十分遅れで、無事函館港外に来た。しかし、僚船はすべてテケミをしていたのに、なぜ一隻だけ出港して来たのだろうか。微妙な船長の心理は、うかがい知ることができない。

通信部から提供された先船の海峡模様と、大間、龍飛の気象状況を入手して、任堂船長は、テケミする場所を函館に決めた。難無く函館港外に到着する。が、強風のため着岸不能となり、港外に投錨、テケミとなったのは、午後六時五十分だった。

まもなく、予想もできなかった強風と巨浪に襲われ、船尾開口からの浸水で、機関が使用不能となる。船員一同、獅子奮迅の働きをしたことは、局への通信報告が五隻の中でいちばん多かったことからもわかる。

午後十一時三十六分、「浸水だいぶ収まり、アンカーに異常なき限り安全な模様。付近に沈船漂流中、南十五―二十メートル。未だ衰えず。うねり南西七。動揺右二十度。全員意気軒昂」と打電してきた。沈船は第十一青函丸の船首である。この時、任堂船長は、船橋に坐り込み、ドッカとあぐらをかいていたという。

沈没はその直後で、午後十一時四十三分頃と推定されている。五隻のうち、いちばん後だった。

船長以下五十七名が殉職し、十七名が救助された。

◆沈没した五隻以外の九隻の僚船の状況

青森岸壁に、羊蹄丸（客貨船）と渡島丸（貨物船）が着岸のままテケミをしていた。函館岸壁では着岸のままテケミをしていた石狩丸が、午後八時頃、舫い鋼索を切断されて港内に圧流されて投錨したことは前に述べた。他に函館港内に投錨していたのは、第六青函丸と第八青函丸である。港内に投錨していたが、漂流し始めたイタリア船アーネスト号との衝突を避けるため止むなく港外に出たのが、大雪丸と第十二青函丸だった。第七青函丸は函館ドックに、摩周丸（客貨船）は浦賀ドックに入渠中だった。

結果的に、港内に投錨した船は、一般商船を含め全船が安全を確保し、港外に出た七隻の連絡船のうち、五隻が沈没、二隻が無事に帰港した。また、沈没した船は五隻とも貨車を積み込んでおり、助かった二隻は共に空船であった。それと、沈没した五隻のうち、様相を異にした第十一青函丸を別とし、洞爺丸、十勝丸、日高丸は、投錨して沈没した。投錨しないで踟躕（ちちゅう）した大雪丸、第十二青函丸は助かり、同じく踟躕した北見丸は、既に述べた通り、トリミングさえ試みなかったら助かっていたと思われる。

『青函連絡船』より抜粋転載

著者、坂本幸四郎氏（函中44期・昭和17年卒）は元石狩丸・通信士として洞爺丸のSOSを受信した。

北方領土に思う

34期（昭和7年卒）
徳田　肇

北方領土の歴史的経緯を見ると、一八五五年の日露和親下田条約では両国の国境を択捉島とウルップ島の間と決めており、二〇年後（明治八年）には特命全権公使・榎本武揚が帝政ロシアの都ペテルブルグに赴き調印した樺太（サハリン）・クリル（千島）諸島交換条約では、日本は樺太の権利をロシアに譲り、ロシアは千島一八島を日本に譲っている。

譲渡の対象となったクリル諸島はカムチャッカ半島の南端に隣接する占守（しゅむしゅ）島から得撫（うるっぷ）までの一八島であり、それより南側の択捉や国後などの四島は帝政ロシアでさえ帰属を争わず、日本固有の領土と認めていた。

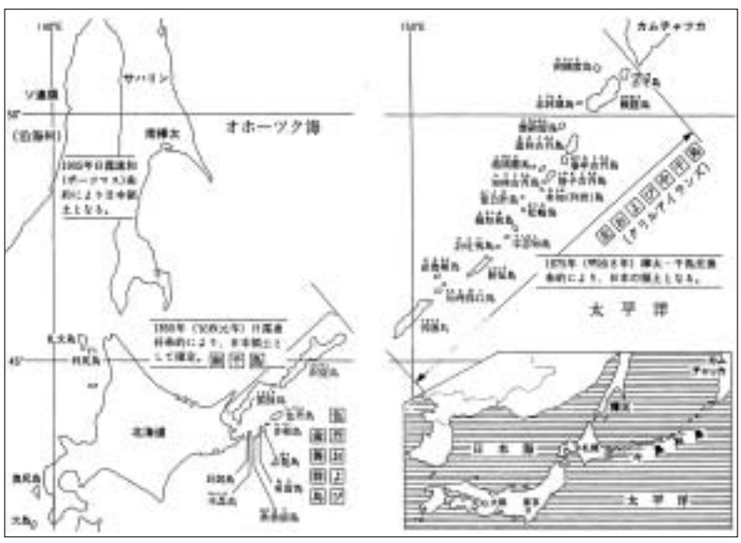
ソ連は、第二次大戦末期の一九四五年二月のヤルタ協定を理由に千島の領土を主張するが、千島一八島がその対象になり得るとしても四島を同列には論じられない。また、ヤルタ協定は日ソが中立条約を結んでいた時期の秘密協定であり、日本が参加していない取り決めである。

私の頭にある北方領土には北千島と南樺太とが含まれる。函館税関長に転じた年の管内視察で宗谷岬に建つ日本最北端の碑から遥か樺太の南端、また、野付（のつけ）の彼方に国後島を望み、南樺太と千島全島が当税関の管轄下にあったころを思い起こしていた。日華事変勃発の年、私は北千島特派官吏として幌筵（ぱらむしる）島に赴任し、漁業用外国塩の輸入と北洋で生産された鮭鱒缶詰の直輸出に対する通関許可事務を担当した。

当時、北千島生産の鮭鱒缶詰は北海道または本州に運送された後、輸出手続きの運びとなる慣例だったが、私が赴任した年から外国貿易船を北千島に寄港させ、不開港地において輸出許可となった製品を直航で仕向国に輸送することが認められた。

クリル諸島は一八七五年日本領となったが、長い間放置状態にあった。やっと一七年目に勅命を受けた侍従・片岡利和一行により占守島の調査が行われ、この事態を憂慮した郡司（作家・幸田露伴の兄）が、翌明治二六年退役して北千島の開発に乗り出す。

第一次計画は全員六三名を得て発足したが、遭難事故や資金難に見舞われ、更に会員の離脱もあって不成功に終わり、辛うじて同志九名と共に占守島に第一歩（二六年八月三一日）を印し、ここで越冬を経験した。第二次の渡島はそれから三年目、家族ぐるみの移住者を含めて総勢五七名であった。漁撈・鳥獣の捕獲・山菜の採取や養鶏のほか野菜の栽培、缶詰の製造にも成功して大いに開発の実を挙げたという。



終わりに北方領土回復問題の進め方について触れると、終戦の全条約を完全に履行し終った今日、当然日本に復帰すべき北方領土の問題にこれという対策もなく、ロシアにのみ呼びかけているのは間違いではないか。現在の非力な日本が単独で解決しようとしても無理な話、国際正論の共感を得た上で国連総会の場に「北方領土返還に関する決議案」を提出して持ち込むという方策が考えられる。

これに対し、ある識者はまず国際海洋問題について日本から進んで沿岸国主権を承認するとか、アジア・アフリカ・中米諸国の水産振興計画に積極的な協力を示す等の方策をとり、幅広い共鳴支持を取りつけることが緊急課題と提言している。

晩翠さんの思い出

45期（昭和18年卒）
田沼　修二

函館中学に入学して、先ず習ったのは「校歌」で、「玄冥の北の一道」で始まる漢語の多い歌詞は頭に入りにくかったが、国語や漢文の授業を受けて、一年程で理解できるようになった。校歌は開校二十年を記念して大正三年に土井晩翠作詞、岡野貞一作曲という、当時気鋭の作者の手で作られた。

明治三十年代に開校した函館中学に、それまで校歌がなかったのも不思議な話であるが、子供から青年に変わる年ごろの男子に相応しい、如何にも男性的な校歌であった。因みに岡野貞一氏は「春が来た」「水師営の会見」などを作曲された音楽学校の教授であった。

土井　晩翠
詩人・英文学者
52.10.19没　80才

明治4年10月23日 仙台市生まれ。二高、東大英文科卒後、処女詩集『天地有情』『晩鐘』をはじめ、『荒城の月』などの多くの名作をのこした。明治の詩人三聖、藤村・泣菫・有明と肩をならべる大詩人。

校歌の第四節に「業ならば双の肩の上に帝国の運も負えかし」とあった。何と大げさな物言いかと白けた気分になったが、その後の我らの人生の軌跡を顧みれば、戦陣に職場に戦中戦後の激動の主役であり、敗戦から繁栄の担い手であったことを思えば、これは晩翠さんの卓見というべき詩文であったといえよう。

函中を卒業して旧制弘前高校に進学し、先ず蛮声轟く北溟寮の歓迎会で度胆を抜かれ狭い部屋の汚さに驚かされた。やがて入学式、校歌斉唱に蛮声はなく、大正十年開校に合わせて作られた土井晩翠作詞、弘田龍太郎作曲の校歌は、青年から大人に旅立つのに相応しい格調高い校歌であった。

その第二節に「希望にあふれて光栄めざし　健児よ活きたる世界にかけよ」とあった。やがて左翼思想が旧制高校を始め、あらゆる高等教育の世界を席巻し、軍国主義の跳梁との対決の始まる直前の時代の校歌である。昭和初期の思想弾圧に屈したり、その後の戦火に陣没した先輩も少なくなかった当時である。しかし戦争を生き抜いた健児達の多くは戦後の復興、

経済再建に奔走し文字通り活きた世界にかけたのであった。

昭和二十二年東北大学に進み、大学のある片平丁に近い広瀬川の河原に琵琶首丁という住宅地があった。仙台の中心街が戦災に逢って、まともな下宿のない頃で、金属材料研究所の助手をしていた兄が二高時代から下宿していた琵琶首丁の部屋に潜り込んだ。付近は一部戦災の跡がみられたが、戦前から大学の先生達の住居が点在する落ち着いた住宅地であった。

大学に通う道すがら、時折り眼光鋭い小柄な老人に出会うことがあった。老人は時に床屋の親父と仙台弁で話し合ったりしていた。なぜかこの老人が気になり下宿のお婆さんに聞いてみたら「あれは近所に住む土井晩翠先生」で、既に二高を退職され「今は奥様共々心霊学に凝っている」とのことであった。晩翠さんは素晴しい才能を抱えたご令息に夭折され、常軌を逸して霊界との交流に打ち込んでおられるとの噂であった。

藤村とならんで明治を代表した天才的な詩人であり、私にとって因縁浅からぬ二つの校歌の作詞家の晩年を、心を痛めながら見つめた事を思い出す。晩翠さんはそれから暫くして昭和二十七年に霊界に旅立ってゆかれた。

北方四島と函館をつなぐ海の道

61期（昭和34年卒）
三上　洋一

北方領土の返還がなかなか実現しないのは、沖縄と違って日本人が現に居住していないからだとも言われている。元島民の一人（10歳まで択捉島・留別村居住）として、せめて往時の日本人の生活がどんなものであったか、紹介してみたい。

択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の北方四島は、断崖の海岸線、広い原始林、鮭鱒が上る沢山の河川と湖沼、広い湿原とお花畑、火山を含む高い山々のある美しい島である。しかし、平野は少なく、良港はまれで積荷は艀（はしけ）作業が一般的であった。島内の交通は馬と船、冬はスキーであった。合計面積はほぼ千葉県や福岡県に等しい（図参照）。

戦前（一九四一年）の定住人口は一七二八九人（三一二三戸）であった。島民の多くはは北前船文化圏の北海道、青森、秋田、富山県等の出身である。極めて過疎の地であったが、漁の盛な夏には、五〇〇〇人近い季節労務者が東北地方や渡島支庁からやってきた。酒作りの杜氏のように、船頭が率いる労務者（やん衆）が漁業現場を受け持ち、網元や漁業会社は次の間付きの部屋を与えて船頭を厚遇した。加工現場にも塩蔵技術の指導者を中心に似たような集団があった。

四島の主産業は鮭、鱒、蟹、鱈、鯨、昆布、海苔などの漁業で、鮭・鱒孵化場は14、缶詰工場と水産加工所は32あった。製品は主に函館、根室、横浜に送られ、昆布と缶詰は輸出もされた。林業と馬を中心の牧畜も行われていた。辺境ではあるが経済的には豊かで、戦時中も米、灯火用石油等はどの家も3年分は備蓄していた。

千島航路は根室―四島線（百トン以上）と函館―四島線（三〇〇～五〇〇トン）があり、「命令航路」には補助金が出され合計年間二一四航海（昭和15年）が確保されていた。この内、函館からは八五航海（六二回は金森商船）で、函館・金森倉庫との密接な結びつきを示している。民間運行の自由航路も漁期には活発で、特に択捉島―函館間は三〇〇トン級の船で年間一二二航海（昭和15年）が記録されており、択捉―根室間がわずか三〇航海であるのと比べて興味深い。航海数から試算すると、択捉島の産物の大部分が函館に集荷されていたことになる。一方、函館からの定期船は洒落た衣服や本、キューピーマヨネーズなどを運んできたので、来航が待ち遠しかった思い出がある。

択捉島は沖縄本島の約2倍半

函館のカレー

54期（昭和27年卒）
金谷　稔

私はカレーが大好きである。

現在、私が東京で最も愛する店「印度カレーの中栄」は築地市場の中にあり、営業時間も早い（朝の6時から14時迄）が、印度カレー（400円）、ビーフカレー・ハヤシライス（500円）の他には野菜スープと味噌汁だけというシンプルさで「安さと速さ」が売りである。勿論、味もいい。この店を知って以来『カレーはB級グルメの帝王』だと確信している。

私のカレー好きの原点は、函中野球部の納会で供されたカレーと汁粉の食べ放題だったように思う。戦後間もない頃、カレーは最高のご馳走だったのだ。

だが、東京での貧乏学生時代は勿論、社会人になってからもカレーは私にとって変わらず最高のご馳走で有り続けた。

「函館のカレーと言えば五島軒」と多くの方が仰るに違いない。何しろ、そのレトルトは日本各地のデパートなどに出回り、今や函館が誇る全国的なビッグネームなのだから。

だが、学生時代の私が帰省した折りに食べていたのは十字街の電車通りからちょっと引っ込んだ所に店を構えていた「小いけ」のカレーだった。

そして、社会人になってからも機会あるごとにちょっと苦味の効いた「小いけ」のカレーの風味を楽しんだものである。ただ、いつの頃からか店が電車通りに面していたので「表通りへ進出したのだろう」ぐらいに気軽に考えていた。

昨平成15年、【第27回親睦大会】の記念ビデオを製作する機会を得た私は、函館を訪れる度に喜び勇んで十字街の電車通りに面した「小いけ」へ足を運んだ。

そんなある日、時間に余裕のあった私は「昔の店の場所はどの辺だったろう?」といった軽い気持ちで裏通りへ入ってみた。ところが何と、その裏通りにも「小いけ」があるではないか!

狐に摘まれた気分の私だったが、早速その店に入り怖々賞味した。2軒の「小いけ」のカレーの味が同じものだったか、或いはどう違ったのか、正直言ってその時も今も分からない。

何やら複雑な事情があってのことだろうが一介の客がその理由を当事者に訊ねることも出来ない。

その辺の事情にお詳しい方がいらっしゃったら、そおっと教えて戴きたいと思っている。

それはともかく、この次函館を訪ねた時は2軒の「小いけ」のカレーの味を、是非じっくりと味わいたい!!と楽しみにしている。

当然、両者は人的関係も深かった。択捉の網元は多く函館からやってきて、また、子弟の教育も函館であった。ちなみに明治時代、祖父も函館からやってきて、網元、牧畜、郵便局（通送業）を始めた。父は函商、叔父は函中卒である。

本稿を記す間に、日露通好条約締結一五〇周年記念日に向けて、平成17年初めロシアのプーチン大統領が訪日することが決まった。日露関係も新しい局面を迎えるかもしれない。国民世論の強い支援を受けて、外交交渉により四島が戻り、函館港に島の産物が続々と荷揚げされる日を期待したい。

あの一球！

63期（昭和36年卒）
渡部　義徳

昭和四十四年九月二十三日午後十二時三十分、第二十二回全道高校野球秋季大会（新人戦）の四日目で所は札幌市営中島球場。準決勝、函中部対網走南ヶ丘戦である。

私は、函中部高を昭和三十六年に卒業し、四十年に体育教師として母校に赴任することができた幸せ者の一人である。

高校入学時の担任は浜岡先生でことのほか野球に理解が深く、自然とその道に進んだような気がする。当然、野球三昧の高校生活であった。

教師一年目から、浜岡先生、横田先生に野球の精神を教わり、可愛がっていただいた。

当時は部員が少なく、練習量もままならず、戦績もぱっとしなかったが、選手たちの情熱と意気込みは私を勇気づけてくれたものであった。

昭和四十四年の秋の函館地区予選は一・二年生部員が八名（内一名は女子マネージャー）であった。大会直前に二名を取得・入部させ十名（実質九名）で基本練習に明け暮れた。

また、悪いことが重なり、大会前に修学旅行があった。だが、選手たちは、「今まで苦楽を共にしてここまでやってきたのだから、大会に出場します」と言ってせっかく積み立ててきた費用や準備したものを横目にして夏の合宿入りをしたのである。

これにはさすがの私も驚いたが選手たちの意気込みと野球への愛情、そして決意の深さを知り、悔いのない練習に心掛けることになったのである。

なぜ私がここまで入れ込んだのか。それは抜群のセンスとスピードを持った大久保という投手がいたからである。高校野球の八十パーセントは投手如何である。これに賭けてみることにしたのである。

函館地区予選は九月五日から十六日まで、函館市営千代ヶ台球場で行われた。当時の強豪は函有斗、函工、函商、郡部では江差、長万部などであった。

地区予選は接戦・激戦の連続であった。函有斗と函工が一回戦でぶつかり、その勝者と函中部が当たるという組み合わせもあり、星のつぶし合いであった。二回戦、函有斗を二―〇で、三回戦対松前を三―一、準決勝対函商を二―一と接戦をものにし、部員十人で勝ち取ったまさに涙の優勝であった。

部員十人で地区大会を優勝したのはいいが一人でも怪我人を出したら没収試合という未曾有のことになるのでバスケットボール部の春木先生にお願いし、部員二名を借りて急遽補欠選手として登録し急場を凌いだものであった。

昭和44年当時の部員たち

全道大会での初戦は二回戦で優勝候補の札幌光星であった。打撃快調、うちのチームにこんな力があったのかと思うくらい打ち、十五安打九点の猛攻撃、しかし、投手大久保も十五の四死球と大乱調であった。相手はこの荒れ球に的を絞れず、好機が続いたが、一発が出ず六点で終わり、ハラハラの勝利をものにした。

準決勝は芦別工を破ってきた網走南ヶ丘である。

両軍投手の好投もあり試合は淡々と進んだ。六回裏、函中部の攻撃、ヒットの小野が二盗、ボークで三進した一死三塁に、小田島にスクイズのサイン。これが無情にも投前の小飛球となり併殺に終わってしまった。

七回表、網走南ヶ丘の攻撃、一死後、四球で出た走者が、大久保の暴投とボークで三進。二死後のことであった（六回裏の攻撃と同じ場面である）。カウント二―〇の後の三球目である。

ベンチでは、あと二球は遊べる、ギリギリのところで勝負だ。ワインドアップはホームスチールの危険があるからセットで投げろと捕手に指示する。捕手若林うなずく。七回までヒット一本で抑えてきている大久保のことだから、まず大事はないだろうと考えていた矢先、大久保は大きくゆっくりとしたモーションでワインドアップの体勢に入り、振りかぶった瞬間、走者はスルスルと本塁に向かって走り出した。心配していたホームスチールの決行である。大久保はその姿を横目でちらっと見、またサードの主将対馬の「逃げた」の声とベンチからの「はずせ」の声でウエストした。捕手若林は、走者の姿が目に入り不意を突かれ高目のスピードボールを必死の捕球も虚しく、ボールを後方へはじいてしまった。

その結果、一点が返せず、一―〇で敗退し、相手は甲子園に行ったのである。相手は一安打十一三振であり、こちらは三安打十四三振であった。

あれ以来今日まであの高目の一球が頭から離れずにいるのは自分だけであろうか。

現役を離れ、高野連の役員として、夏の大会での虻田高校野球部主将の始球式、二十一世紀枠で出場した鵡川高校、希望枠出場の旭川実業高校、また二十一世紀枠出場惜しくもならなかった函中部高校の選考にかかわるなかで当時を思い出し、甲子園出場の機会を逃した「あの一球」は「痛恨の一球」として私の生涯の語り草である。

還　暦

64期（昭和37年卒）
池田　斉

「オレ、このごろウツなんだよ」

職場の食堂でお昼を食べながら、半分本気で私は言った。すると同期の彼は、

「お前、この年になって元気な奴なんて、躁病かも知れないぞ」と笑って受けとめてくれた。

去年の誕生日で六十歳になった。還暦である。六十歳になって何も変わることはないだろうと思っていた。ところが、職場の還暦祝いで赤いチャンチャンコや赤い帽子を被せられてからは、六十という数字が妙に頭にこびりついて離れない。疲れやすくなったり、目が悪くなったのも、急に起こったことではないのだが、六十になったせいかと思ってしまう。そういえば、ゴルフも急に下手になったし、十年ちかく続けてきたアマチュアオーケストラも、練習がきつくなってやめてしまった。

そんなパっとしない気持ちの続いた十月の初めである。高校のクラス会「還暦を祝う会」があって、故郷の函館に行くのは珍しい。秋に函館に行くのは珍しい。

その日は、朝から快晴で気持ちのいい日だった。夕方のクラス会まではだいぶ時間があったので、市内をブラブラ歩くことにした。ホテルのある函館山の麓から、北へ向かって市電通りに沿って歩きだす。風はすでに秋だったが、日射しは暖かくて、ハーフコートの中は汗ばんでくるほど。十字街から函館駅、昔の目抜き通りの大門を通って、五稜郭へ向かう。旅行カバンを下げているが、気分はすでに地元の人間である。呼吸する空気や足元の土は、自然に身体になじんでくる。高校卒業までの十八年間、私を育んでくれた故郷の風と土は今も変わっていない。五稜郭へ向かう電車道を右に折れて、母校の函館中部高校へ立ち寄った。休みのため学生の姿はほとんど見られなかった。校舎は建て替えられていて、昔の面影はほとんどない。ただ、正面玄関の脇に植え替えられた十本たらずのポプラの樹だけは、昔と同じように青い空に向かって高く伸びている。私は深呼吸して、ポプラ独特の植物くさい匂いを胸一杯に吸い込んだ。

クラス会は函館山の山頂にあるレストランで開かれた。窓の外には、美しい夜景が広がる。ちょうどその夜は満月で、東の空に真ん丸の月が昇っていた。光をちりばめた街をはさんで、東西から海が迫る。月光が海に照り映えている。集まった五十人の仲間は皆、紛れもなく初老の男女だった。しばらくぶりで会った人など、人相が変わっていて誰だったか思い出せない。でも、話しているうちに昔の顔が浮かんでくる。彼らは皆それぞれに苦労しながら、頑張って生きている。高校のクラス会は、大学のクラス会と違って、仕事も生活も別々なので、いつも新しい発見がある。世の中をまた別の角度から見直すきっかけにもなる。クラス会に出てよかったと思った。

還暦は人生の一つの節目である。これから先どうやって生きてゆくか考えるよい機会である。年をとったと、最近ちょっと元気のなかった私にとって、久しぶりに味わった故郷と、昔の仲間との時間は、私を癒してくれて、新たな勇気を与えてくれたようである。

「田中政治」の生き証人
早坂茂三氏逝去

昭和５年６月函館市恵比寿町生れ。18年東川小学校卒業、24年函高（51期）卒業、25年早稲田大学入学。
30年東京タイムズ入社、37年田中蔵相の秘書になる。47年田中内閣秘書官、54年評論家に転身。

早坂茂三氏の死

「またがんセンターに入院する。すぐ出てくるから参院選のことを教えてもらいたい。それじゃ」

5月8日の昼、野中広務氏と三人で食事をしたあと、早坂茂三氏(73)はこう言い残してタクシーに乗り込んだ。早坂氏は二〇〇二年の2月と11月、わずか半年間に肺がんと前立腺がんの手術を立て続けに受けている。しかし、巨漢も変わらず、大きな声もそれまで通り。むしろ前にも増して講演、執筆を精力的に続けていた。好きなたばこをやめることもなかった。それだけに6月20日の訃報はいまだに信じられない。

昨年の暮には共同通信の新社屋を見たいというので社内を案内したことがある。眼下の街並みに視線を落とし「あの辺に東タイ（旧東京タイムズ）の本社があったんだ」とじっと見詰めていた姿が今も忘れられない。早坂氏の略歴は必ず「東京タイムズ社を経て」で始まり「田中角栄氏の秘書となり」と続く。今は廃刊となった東タイの新聞記者であったことは早坂氏の大きな誇りだったようだ。

田中元首相の秘書となって以降の早坂氏については数々の武勇伝を含めて今さら説明する必要もないだろう。最大の転機は一九八五年2月27日に訪れる。田中元首相が脳梗塞（のうこうそく）で倒れたのである。その入院から三ヵ月半たった6月15日、元首相の長女真紀子さん（前外相）が突如として事務所を閉鎖する。早坂氏ら秘書の側から見れば強制解雇だった。「目白のお姫さまは何をするか分からない」と言いつつも「ちょうど55歳。サラリーマンなら定年の年だ。第二の人生を考えたい」と自ら区切りをつける。だが、首相経験者の大物秘書の再就職となるとそう簡単ではない。救いの手を差し伸べたのが共同通信元専務、故松崎稔氏だった。

「おい、早ちゃんが何とか飯を食えるようにしようじゃないか」

ほどなく早坂氏は共同通信が加盟社と一緒に事業展開している政経懇話会で「政治評論家」としてデビューすることになる。弁が立ち、筆も立つタレントは瞬く間に売れっ子になる。政治学者から名誉の評を得た「政治家田中角栄」（中央公論）に始まり、新潟・長岡が生んだ幕末の名家老、河井継之助、旧連合艦隊司令長官山本五十六、そして田中氏を重ね合わせた「怨念の系譜」（東洋経済）まで、元首相の政治と人となりを書き尽くし、語り尽くした生涯だった。早坂氏の他界はまた一人の戦後政治の生き証人を失うことを意味した。

早坂氏は数々の角栄語録を口にした。その中の一つに「慶事のお祝いは遅れてもいいが、葬式は一回限りだ。心を込めた弔電、花を急いで用意せよ」というのがあった。しかし、早坂氏は自らの末期に臨んで「死後一週間は公表しないよう。葬儀はするな」と命じたという。もはやその真意を聞くすべはないが、田中角栄という天才政治家と巡り合い、波瀾（はらん）万丈の人生を送った早坂氏の心情が理解できるような気がする。

病を得てから早坂氏はしばしば生まれ故郷の北海道・函館に足を運んだ。早坂氏が好んだ石川啄木の和歌がある。

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌矢ぐるまの花

心から冥福を祈りたい。

（共同通信　政治部部長・後藤）

第45期・翠楊会

田沼修二 記

例年通り、今年も6月26日(土)昼、NHK青山荘で翠楊会東京支部の総会を開いた。体調不良や他の会合と重なったりで、34名の会員中、参会者は13名と淋しい集まりとなった。高齢化と共に参会者の減るのは止むを得ないことであろう。

会は久しぶりに出席した池田和行君の乾杯ではじまり、出席者の近況報告に移ったが、やはり老人病といかに付き合うかが共通の話題であった。長年幹事を勤めてきた船木君が昨年春に軽い脳梗塞に罹り、会話に不自由はないが右手足が不自由とのことであったが、市川から青山まで独りで電車でこられたのには感動した。

一方、鵜澤君のコーラスと小唄、中野君のピアノとスキーに励んでいる話には脱帽した。他に詩吟やカラオケで老化防止に励む仲間もいて心強い限りであった。

アルコールの消費量はめっきり減ったが名残りは尽きず、散会後も喫茶室に席を移して、コーヒーで歓談が続いた。

第61期 有江・佐久間先生をお迎えしての秋の旅行

藤田美穂子 記

61期では数年前から毎年一回一泊旅行を行っています。昨年平成15年の秋には函中時代の恩師 有江良久先生、佐久間政弘先生の参加を頂き、袋田温泉一泊のバス旅行を行いました。参加者は札幌、函館、大阪、九州など関東近県以外の方もあり四十名になりました。旅行前日に遠方から上京された参加者は、コマツ（同級生の石月さんのご配慮により）の麻布クラブに泊まっていただき歓迎を兼ねた前夜祭で先ず疲れを取っていただきました。

当日は11月の初めにしては珍しい程の暖かな晴天に恵まれました。東京駅8時出発、四十名を乗せた貸し切りバスはスタート。ビールや日本酒も入り隣同士の話や遠方からの参加者や両先生の近況などを伺いながら、栃木県の日本酒蔵元外池酒造へ立ち寄り見学、試飲、買い物をして益子に到着しました。昼食と自由時間の間に浜田庄司の作品や登り窯がある益子参考館を見学したり、お買い物をしたりしました。30分程バスに揺られ花王㈱栃木工場に到着、同級生の佐々木さんのご配慮により二時間の工場見学、無菌服に身を包み、無人に近い衛生管理の行き届いたサニタリー製品の生産工場を見せて頂きました。研究員の講義や今話題のカテキンを多量に含んだ健康茶ヘルシアの開発経緯の説明、我々との質疑応答などあり、お土産まで頂いて工場を後にしました。

「袋田の滝」にて

袋田温泉の「思い出浪漫館」に着いたのは辺りも夕闇に包まれ始める頃でした。早速、温泉に入り一日のバスの疲れを流し、宿の浴衣に着替えたり少しおしゃれをしたりで懇親会場の大広間に集まりました。懇親会は両先生のお話から始まりました。有江先生は「昨日今日と感激です。僕の人生で生涯忘れられないような日になると思います。」で始まり、北大時代の恩師入江盛一先生（函中31期）が薦めてくださって昭和22年3月函中に赴任された経緯から数々のエピソードを交え「函中の心」を語ってくださいました。終わりに「初恋」を歌われ、私達も青春の時を思い返し一緒に歌いました。続いて佐久間先生のお話が始まりました。我々を担任してくださった時代、先生の婚約時代新婚時代に我々がいかに先生の私生活までお邪魔をしたか先生のユーモアたっぷりのお話に笑い転げながら当時を懐かしく思い出しました。そして最後の締めくくりに60代は「思い出酒」を呑んでください、70代は「微笑み酒」を、そして私だけは君達を思い出して「ニタニタ酒」を楽しみます。

佐久間先生は旅行参加を決めて9月に硬膜下血腫が分かり手術されその後必死でリハビリに努められ参加してくださいました。その

汽車通学の思い出 ―茂辺地からの汽車通仲間―

昭和15年卒・42期　安富隼平 記

70年前茂辺地以遠から通学された方々の写真を投稿します。

函中正面玄関、中央のお二人は汽車通学担当の先生です。所有者42期関四郎君が40期相馬正樹さん山本安一さん他、旧友数名に問い合わせ、この程氏名駅名等完成し郵送頂きました。

函館本線は別とし上磯木古内線の汽車通学の中でも茂辺地以遠は列車本数が少なく、早朝から夜遅くまで長時間大変なご苦労でした。しかし皆さん元気一杯毎日楽しく勉強しておられました。写真を見ながら当時をなつかしく思い出しています。私は上磯から汽車通学していました。

【後列左から】高田保4年（木古内）・鈴木勲1年（泉沢）・関四郎1年（木古内）・佐藤茂2年（木古内）・高島平蔵3年（茂辺地）・山本安一3年（茂辺地）・筒井勉4年（木古内）
【前列左から】吉川幸男5年（茂辺地）・蛯子英二先生（英語）・町田太郎先生（数学）・松田勝美5年（釜谷）・高尾正保5年（木古内）　昭和10年5月撮影

為お酒も控えられシラフで皆を笑わせてくださいました。有江先生も旅行から帰られて脳の血腫が分かり手術され、私達は驚き心配しましたが今はお元気になられています。お二人の先生はそんな中参加してくださり、私達はここでこの時を先生とご一緒できた事を幸せだと思いましいました。

この夜は久し振りに10代の自分にタイムスリップして、あの時代より素直に自己表現できるようになった自分を感じながら時が過ぎて行きました。

翌日は袋田の滝を見学、三段になって落ちてくる滝の高さと広さの迫力に圧倒されました。紅葉の山々を眺めながら竜神大橋へ向かいました。歩行者専用の吊橋としては日本一の長さ、バスを降りて吊橋を渡り紅葉の渓谷を上から眺めました。続いて徳川光圀の隠居所、西山荘を訪ねました。広い庭園の奥にひっそりとありました。

佐久間先生　　有江先生

最後に那珂湊港に寄り新鮮な魚の昼食とお買い物、安い新鮮な魚をお土産に買って東京へと戻ってきました。帰りのバスの中で佐久間先生の「人生には無限の問題がつきまとうけれど、真実と思われるものも両面がある。あらゆる物は多面性がある」とおっしゃったことが心に残りました。

数ヵ月後、50ページの本格的旅行の文集が出来上がりました。今回は残念ながら旅行に参加できなかった山本健二郎先生他数人を含めて、47名の有志が執筆してくださいました。その中に有江先生がサミュエル ウルマンの青春という詩を寄せてくださいました。『青春とは人生の或る時期を言うのではなく、心の様相を言うのだ。』で始まる詩に我々は何時までも青春で居たいものと思うと共に、少し先を青春真っ只中でいらっしゃるお二人の先生方の姿を頼もしく思いました。

第63期・報告

山崎 良英 記

去る7月10日（土）63期会の例会（第21回）が東京「ニュートーキョービル」桃杏楼にて開催され、男23名、女6名でにぎやかなひとときを過ごしました。15年ぶり、12年ぶりというメンバーに加えて、函館から柳田君、札幌から本谷君も参加、一番遠くから来たのは12年振りの打越君（米国ヒューストン在住）で、15年ぶりの嶋津君は新潟からの参加でした。

永年幹事の小林君の音頭取りで始まった会は、各自の近況を話しているうちに収拾がつかなくなり、いつもの様にワイワイガヤガヤ状態になってしまいました。かなりのメンバーは退職していますが、今も一線で頑張っている連中も多く、話題は健康と孫の話が多かった様です。

目当ての彼女が居なかったり、娘の結婚話をしたり色々でしたが、相変らず大声の3名（I、O、U君）が、今回は全員出席でワーワーやっているうちに一次会を終えました。二次会は1Fのニュートーキョーのビアホールに移し、またひとしきり盛り上がりました。三次会へ行った面々は11時迄（2時から飲んで）やったそうです。

全員が元気で来年も会う事ができる様に祈っています。（第1回は一九八三年で皆んな40歳だった事を思うと年月を感じます。）

第65期・函中三八会

菅原 大作 記

今年の函中三八会は、7月17日（土）、18日（日）の両日、東京・文京区本郷の〃鳳明館・本館〃で行われた。

今年も、昨年に引き続き、一泊二日の日程で実施した。鳳明館・本館は、明治末期創業の純和風旅館。文化庁の登録有形文化財の指定を受けている。

今年は、22人（男17人、女5人）が参加。うち16人は宴会のみで、宿泊組は6人（男5人、女1人）。土日の開催で、宿泊者が多いと考えていたが、三連休前半の二日という日程の関係で、思ったより参加者が少なく、また宿泊者も少なかった。今年の遠隔地からの参加は札幌の高向（三田）暁子さん。久々の参加は、岩田美朝、川村　宏、瀬戸清勝、林奥、山初省吾の各氏。

初日の17日は、午後3時の集合。一風呂を浴びて、午後6時30分からの宴会は和室の大広間で、二の膳つきの箱膳を前に座布団に座って、宿泊組は浴衣がけで落ち着いた〃あずましい〃雰囲気だった。

乾杯後には、自己紹介を兼ねた近況報告をしてもらったが、今年が60歳の定年を迎える人が多く、年金手続きを既に終えた人が体験談を伝授したり、退職して函館に戻る人、初孫の話など、高校時代の話より、これからの人生をどう過ごしていこうかという話が多く、いつもの会とは違った雰囲気の会合だった。

翌日の予定などの関係で、午後8時30分過ぎに記念撮影をして一次会を終了。残れる人は、別室での二次会に。二次会会場は、およそ12畳の和室で、膝を突き合わせて高校時代から今までの人生と、これからの生き方を話しあったが、午後10時過ぎに散会し、宿泊組の見送りに送られながら次回の再会を約束して別れた。

第68期・よいよい会

木戸 正文 記

毎年「どこか一泊で温泉にでも行きたいね」との話があるがなかなか実現できずにきた。

今回は白崎さんのお骨折りで鬼怒川温泉、某保養所が手配できた。ひと風呂浴びて、まずはビールで

乾杯。

近況報告では札幌医大の学長に同期の今井浩三さんが選出されたとのビックニュース、あちこちで携帯に収められた、孫自慢が始まり、さらにカラオケにくりだした。

一夜明けると鬼怒川はいい天気。川下りでは船頭さんのパフォーマンスと水しぶきを楽しみ、日光江戸村では、おいらん道中とお芝居、初めてのおひねり、などなど。

参加者は少なかったが、梅雨時の新緑とマタタビの白い葉が美しく、さらに温泉で心身ともにリフレッシュできた2日間であった。

参加は麻田、大河原、児玉、塩田、村上さん　荒谷、奥野、及能、木戸、白崎、高橋、武内、淵沢君。

第71期

加納元雄　記

第71期同期会大会は、6月19日(土)4時から、有楽町のニュートーキョービル7F「桃杏楼」で行いました。

出席者は、当初四十名の予定が三八人。今年の大会初参加は、川村宣明君、須藤真弓さん(以上6組)、及川愛二君（7組）、それに函館から駆けつけてくれた佐藤潔君(10組)の4人でした。

実は欠席者の一人が、10組の担任で函館から来られる筈だった、柴田隆一先生(函中・51期)。函館空港が霧のため飛立てなかったのです。

それでも千歳経由でお出でになり、連絡を戴いたのが二次会もお開きになった夜十時頃。そんな時間でも遊びとなると疲れることを知らない十四人だけが、銀座のカラオケボックスで再会を果たしました。

三十五年前の思い出や近況を語り合った後、大カラオケ大会になりましたが、教え子達は一九六〇年代からせいぜい八〇年代の歌ばかりなのに対し、柴田先生は昨年発売の新曲の歌いまくり。

いまだに不肖の弟子達であることを噛み締めつつ、日付が変わってめっきり人通りの少なくなった銀座を後にしたのでした。

第78期・いいんでない会

宮崎恒春　記

4月17日（土）18時前　渋谷ハチ公前に周りの若者とは明らかに違う一グループが集合しました。目印は赤いスキー帽をかぶった斯波。函中卒業以来28年ぶりに再開するのですから　目立つ格好をしてほしいとの依頼に斯波が応じてくれたのです。

東京近郊の同期会「いいんでない会」に昨夏東京に引っ越した小生も合流しました。ハチ公前には岡部（三浦）、富山、吉崎（丸ちゃん）、武藤（星野）、成田、若山、長沢、垣坂、金谷、島津、松田、福本、斯波、宮崎。

18時開始の宴は気がついたら23時。延々5時間、ビールとワインを飲み続けました。後半は「もしも同期の誰かに会えるとしたら誰に会いたいか」で大騒ぎに。皆さん「○○に会いた～い」って　叫んでいました。そして小生の手元にはその叫んだリストが……。

次回の幹事は一人でも多く14名の酔いどれの願いを叶えるべく同期に連絡を取ることでしょう。その時はご協力を。

PS　今回のメンバー＋αで同期のメールリングリストを作成し、北海道～岐阜に散らばっている同期の他愛無いやり取りをしています。同期のみなさん、ぜひ参加くださいませ。

連絡はtmyzk2000@yahoo.co.jpまで一報下さい。

ホームページ・コンテンツの募集

白楊ヶ丘同窓会東京支部ホームページhttp//www.hotweb.or.jp/hakuyou/（以降HPという）を“役に立つ”“魅力”を感ずる内容へと再構築を図っておりますが、HPに掲載するコンテンツ（素材）が不足しており、内容を充実するために、皆様方にコンテンツ収集のご協力をお願いいたします。

同期会、ゴルフ、旅行、個展、ライブ、講演などの開催予定、HPに関するご希望、アイディアなど、ご気軽にご連絡下さい。

そしてこれらのイベントの状況報告や写真を提供して頂きますと、各期の活動報告やWebアルバムを製作し、HPとリンクさせ全国の友人・知人と楽しむことが出来るようにいたします。

連絡要項は下記のような内容でお願いします。

【各期同期会開催案通知】の項目に載せる（同期会・ゴルフ・旅行など）
卒業期　例：67期/期愛称（例　志丸会）/開催期日/会場名＆Tel/会場場所/幹事名＆連絡先　等

【函中・郷土出身者開催行事】の項目に載せる（個展・ライブ・公演など）
イベント名/卒業期/開催日時間/会場名＆Tel/会場場所/最寄りの駅/会費等

連絡は（1）～（4）の方法で、チラシなど在りましたら郵送、FAX、E-mailの添付ファイルでお願いします。

（1）郵送：〒160-0022　新宿区新宿1-13-8-302
白楊ヶ丘同窓会東京支部事務所
（2）FAX：03-3341-5048
（3）E-mail：mikimatsu@r9.dion.ne.jp（松田幹夫）
（4）HPの掲示板に直接書き込む

ホームページ担当　67期（昭和40年卒）松田幹夫

～企画運営委員会からのお願い～

1．会費納入と登録会員拡大にご協力を！

現在東京支部の会員数は3600名に達しておりますが、残念ながら会費納入者はH15年度は800名を割るまで減少し、同窓会運営が厳しくなっております。会員の皆様におかれては、何卒会費のお支払をお願いいたします。

（年会費：3000円）

払い込み機関：郵便局　　口座番号：00190－1－124291
加入者名：白楊ヶ丘同窓会東京支部

また、首都圏在住の同窓生で、同窓会に登録されていない方は、まだたくさんおられるはずです。消息不明者の発掘にも会員の皆様のお力をお貸しいただき、より多くの方に同窓会に参加していただきたいと考えておりますので、こちらもよろしくお願いいたします。

2．評議員のいない期は代表者の擁立を！

現在、全卒年期から漏れなく評議員を選出していただき、特に若手会員が活性化するように、担当役員が努力しておりますが、以下の期の方については是非代表を決めて頂き、また皆様からもお知り合いの方にお声を掛けて戴いて、事務局へご連絡ください。

現在評議委員の届け出がない期：85期（S58年卒）～87期（S60年卒）、92期（H2年卒）～106期（H16年卒）

3．H17年度親睦大会開催要領と開催時期変更

4月26日開催の理事会・評議員会において、H17年度より親睦大会のイベント担当を毎年50歳到達期が担当することに決定されました。役員は従来通り協力しますが、最も充実している年代の皆さんに担当戴き同窓会活動へ活力を吹き込んで戴きたいと思います。ちなみにH17年の大会は75期（S48年卒）が担当します。

なお、H17年度は函中創立110周年記念行事が函館で10月15日（土）に開催されます。従って、東京支部親睦大会の開催日はH17年9月24日（土）に早めることになりましたので、ご予定願います。

4．フレッシュな仲間の紹介

2004年3月卒業された25名の新入会員を、白楊ヶ丘同窓会東京支部に迎えることになりました。よろしくお願いします。

[1組] 川井　彩・齋藤恵介・田近昌也・津金真一郎
[2組] 市橋衣佳・齋藤恵吾・高山聡美・塚谷桃子
[3組] 大脇史香・小松聖深・佐藤　淳・高橋美和・成田有理・橋　麻子
[4組] 笈口育未・黄地倫子
[5組] 国安秀隆・齋藤妹子・坂本正樹・千葉茂樹・堀口真由美
[6組] 齋藤純子・高橋弘毅・花田達郎・松田潤治

平成15年9月以降の会費の振替用紙のメッセージから

物故者　謹んでご冥福をお祈りいたします。

加藤修一郎（28期・大15年卒）
平成14年8月8日没
土井　恒喜（28期・大15年卒）
平成14年3月3日没
穀田　俊一（29期・昭2年卒）
平成14年3月没
田辺　謙輔（29期・昭2年卒）
平成12年8月没
成田　敏男（29期・昭2年卒）
平成14年7月没
湯浅　善雄（29期・昭2年卒）
平成14年2月5日没
荒川　正夫（31期・昭4年卒）
平成14年1月没
八谷　哲郎（32期・昭5年卒）
平成14年10月没
廣井久之輔（33期・昭6年卒）
平成13年8月没
岡崎　弘（35期・昭8年卒）
平成15年9月4日没
松本弥一郎（35期・昭8年卒）
平成11年1月31日没
柿田　勇（36期・昭9年卒）
平成15年8月5日没
古谷　義明（37期・昭10年卒）
平成13年10月没

◇渡辺　忠雄（19期・大6年卒）
新秋の候皆々様御繁栄をお喜び申し上げます。当方主人こと105歳を迎えまして、健康上の都合により欠席させて頂きます。（奥様）

◇木原　芳男（34期・昭7年卒）
老年となり目下脚が悪く歩行困難。月1回の医者通いも車椅子で行く状態です。でもテレビで函館が写されるものは懐かしく、必ず見ています。ご盛会を祈ります。

◇浅野　辰雄（35期・昭8年卒）
病気入院中で参上出来ません。皆様によろしくお伝えのほど。（奥様）

◇佐々木孝充（35期・昭8年卒）
小生卒業後は満鉄入社、戦後は新潟に在住。在満時白頭山（北朝鮮）に行き、天池で泳いでみる。中国語通訳およびボランティア通訳。（川柳）「雲流る　紅い夕陽の満州の夢」　無尺

◇佐藤　洋（35期・昭8年卒）
徒に馬齢を重ね、8月に米寿を迎えました。久しぶりで出席させて頂きたいと存じます。

◇松丸　秀夫（35期・昭8年卒）
「東京白楊だより」第26号には感心致しました。資料的価値が高く、著者、編集者の御苦労がしのばれます。

◇村上　敏夫（35期・昭8年卒）
出席出来なくなって久しい日月になりましたが、尚長い闘病にてこれで終わると思います。思い出の記事、写真を見て思い出に耽っています。御盛会をお祈り申し上げます。

◇出町　卓（36期・昭9年卒）
パーキンソン病で歩行困難のため欠席です。

◇三國　栄徳（36期・昭9年卒）
4月18日大板橋病院入院、5月27日王子青協病院転院7月22日退院。目下リハビリ中。先が見えて来た感じ。老兵は去るのみ。後輩諸兄の健勝と御成功を祈る。

◇松原　竹造（36期・昭9年卒）
小生ボーイスカウト中野4団団員長として、また中野地区顧問としてもいまだに現役で頑張っております。ご盛会をお祈りしております。

◇鳳間　憲吉（37期・昭10年卒）
7月下旬函館訪問。新駅の見学、未来大学の見学、中部高校を訪問。以降腰痛発生、近々MRI診察します。歩行困難のため欠席させて頂きます。

◇釣谷　光博（37期・昭10年卒）
体の方々に故障がありますが、コツコツと修理し、元気にしております。でもとても若い人について行けません。御盛会をお祈りします。

◇松木　信（37期・昭10年卒）
私は家内に先立たれて早2ヵ年を迎えようとしており、今は長男に手伝ってもらっております。

◇柿本　大壱（38期・昭11年卒）
満85歳になり、何も仕事をせずに過ぎた日々を想い出しています。函館市は私の生まれた場所であり、なつかしんでおります。白楊ヶ丘同窓会が盛況に行われることを祈っております。

◇西原林之助（38期・昭11年卒）
元気にしておりますが、遠出は無理になりました。皆様によろしくお伝え下さい。

◇河村　泰平（39期・昭12年卒）
皆様御清祥にてお喜び申し上げます。会を重ねる度に盛会の様子が分かります。毎度消息を問い合せて頂き、恐縮に存じております。皆様に何卒よろしく。

◇小西　繁男（39期・昭12年卒）
病気入院中のため出席出来ず残念です。皆々様によろしく申し伝え下さいませ。

◇佐々木忠男（39期・昭12年卒）
東京白楊だよりを毎号お届けいただき誠にありがとうございます。どの号にも40期以前の方の記事がなく淋しいな―。と2年半前に脳梗塞で闘病中の主人（忠男）が申しております。（奥様）

◇櫓田　和彦（39期・昭12年卒）
「東京白楊だより」御恵贈頂き有難う御座いました。萩原獅郎先生のお名前が函館同窓会本部の名誉顧問として載っておりびっくり致しました。私達が函中在学中の恩師は先生お一人となったのではないでしょうか。今後共御健勝でおられることをお祈りしております。小生84歳になりましたが、まだ隠居がてら診療に従事しております。もう旅行も億劫になりました。私の兄と同期の横田忠康先生の御逝去を未筆乍らお悔やみ申し上げます。

◇畠山　務（39期・昭12年卒）
なつかしいですが身体が心配で出席しません。月1回病院には診てもらっています。物忘れが多く困ってます。弘高・東大卒ですが、現在少しぼけてます。一応農博ですが。

◇前田　徳尚（39期・昭12年卒）
御盛会を祈ってます。

◇三角　俊登（39期・昭12年卒）
遠路のため欠席致しますが、いつも東京白楊だよりお送り頂き厚くお礼申し上げます。今後とも会の隆盛を祈っております。

◇今井　清（40期・昭13年卒）
東京白楊だより第26号ありがとうございました。特集記事の青函連絡船・洞爺丸は、父が国鉄に勤務していたので、特に興味深く見ております。

◇安富　隼平（42期・昭15年卒）
七重浜の思い出（洞爺丸の記事を読んで）昭和12年夏七重浜で1週間水泳訓練があり、私も漸く泳げる様になりました。泳ぎを覚えてからよく七重浜居住の多久昌三君を誘って堤防の突端に泳ぎに行き、多久君は赤皿貝を狙って潜りを、私は連絡船の通ったうねりの中で立ち泳ぎを練習しました。66年前のことです。

◇梅崎　総一（43期・昭16年卒）
親睦大会には一昨年・昨年共に出席して親友3君（家坂・井筒・神山）に会い懇談しました。今後も出席致しますので、亦皆に会うことを愉しみにしております。

◇高倉　隆（44期・昭17年卒）
日々是好日に過ごしております。

◇井上　義一（45期・昭18年卒）
欠席致します。諸兄によろしくお伝え下さい。

◇篠田　作衛（48期・昭20年卒）
東京支部が益々隆盛を遂げ、活発に活動しておられますことを心からお慶び申し上げます。そして幹事の皆様、誠にご苦労様に存じ、深謝しております。

◇小林　尤二（49・50期・昭21・22年卒）
白楊ヶ丘同窓会東京支部を脱会します。東京白楊だより不要。東京支部には2回程出席しましたが、自分の考えと大きく異なっており、また東京支部の会員となることに、何らの＋がありませんので、函館の同期会のみとします。

◇澤　昌良（52期・昭25年卒）
元気です。皆様によろしく。

◇長島　康（52期・昭25年卒）
いつもお世話様です。益々の発展をお祈り申上げます。

◇漆崎　雄一（53期・昭26年卒）
親睦大会に出席出来ず残念です。皆様によろしく。

◇入江　宏子（54期・昭27年卒）
いつもお世話様です。ありがとう存じます。

◇沢田　経子（56期・昭29年卒）
スポーツの秋、食欲の秋を満喫できる幸いを、ボランティア活動で、年齢は棚上げです。

◇加藤　秀一（57期・昭30年卒）
本年9月、札幌での57期同期会には出席できず残念至極です。来年の同期会は東京の当番、翌平成17年は函中110周年の記念すべき年にあたり、卒業50周年と古希の祝賀会を函館で催すことになります。

◇小竹　嘉子（57期・昭30年卒）
白楊だよりは毎回楽しみにして読ませて頂いております。幹事の方々に感謝しつつ盛会を祈ります。

◇吉田　精吾（57期・昭30年卒）
この1年で同期生3人が永眠し、物故者は全部で33になったという。誠に淋しい限りだ。それだけに毎年の同期会や同窓会で皆さんの元気な姿に接することが貴重な活動源になること間違いない。これからもできるだけ参加していきたいものだ。

◇大関千恵子（58期・昭31年卒）
今夏・秋は体調をくずしておりますので、皆様によろしくご鳳声下さい。

◇山本　哲也（58期・昭31年卒）
御奉仕ありがとうございます。宜しくお願いいたします。

◇芦刈　宏之（60期・昭33年卒）
東京白楊だより第26号のご送付ありがとうございました。恩師の方々、同期会の消息、洞爺丸台風のことなど、沁み沁み読ませていただきました。ポプラの木を見ることもなくなりましたが、白楊魂は忘れないでいるようです。

◇岩崎　英子（60期・昭33年卒）
よろしくお願い致します。

◇村本　光彦（61期・昭34年卒）
東京白楊だより楽しく拝見しています。

◇竹田　幸一（62期・昭35年卒）
東京白楊だよりを毎回懐かしく読ませて頂いております。

◇宮島　睦美（62期・昭35年卒）
お会い出来るのを楽しみにしています！

◇島田　栄（63期・昭36年卒）
白楊だよりありがとうございました。洞爺丸台風の記事興味深く読みました。時任町に住んでおりましたので、時任牧場の言葉を目にし懐かしさがいっぱいでした。

◇中村　良誠（63期・昭36年卒）

いつも幹事の皆様には大変お世話になっております。よろしくお願いいたします。

◇成谷　節（63期・昭36年卒）
10月29日、函館市芸術ホールで日本舞踊のリサイタルを致しますので函館へ行っていて出席出来ません。古典舞踊の他、実在したキリシタン女性の物語「おたあジュリア」を踊り・朗読・音楽による創作舞踊詩として初演致したいのです。やっぱり函館！で初演したいのです。

◇角田　捷雄（63期・昭36年卒）
今年3月定年退職となり、目下充電中です。所用により欠席します。母校の益々のご発展祈念します。

◇山名田英雄（63期・昭36年卒）
会のご盛会をお祈り申し上げます。第9回の関西支部大会も10月11日と間近に迫って来ましたが、皆さんが楽しんでいただければと思っております。

◇佐藤　延子（63期・昭36年卒）
年金をもらえる年齢となり、週2回の非常勤講師と趣味を楽しむ生活をしています。養老山のふもとの茶畑で自然の一部として生きています。

◇平間須磨子（63期・昭36年卒）
東京白楊だよりは実にいつも内容充実で読みごたえがあり、他の方々にも回し読みしています。ありがとうございます。

◇仙石　為之（64期・昭37年卒）
ごぶさたばかりで申訳ありません。本年7月15日に「60歳定年退職」でやっと少しは気持の余裕ができました。

◇藤井　隆一（64期・昭37年卒）
名簿の発行をそろそろ止めませんか。函中出身者と名乗る者からの電話の勧誘（儲かる話）、ダイレクトメールが結構うるさい。会員情報をWEB上に置き、住所、電話番号、メールアドレス、勤め先などの個人情報は、IDとPWを持つ人だけが見られる仕組みが普及しつつある。そろそろ本部で検討しては如何ですか。

◇栗原　訓子（65期・昭38年卒）
現在（株）整理回収機構に勤務しております。来春定年を迎えますが、その後2～3年仕事を続けたいと思っております。どこか適当ない職場を探しております。どなたかご紹介いただけませんか！

◇鈴木　治（65期・昭38年卒）
平成15年6月末をもって東京海上火災保険（株）を退職致しました。

◇細野　ナツ（68期・昭41年卒）
同窓会に仕事の都合にて参加出来ず残念に思っています。会の益々の発展を願っています。

◇丸山　隆（68期・昭41年卒）
仕事で東京・大阪間を往復（多いときは1週2回も）してるが、体力の減退を感じつつあり。

◇浅田　香（69期・昭42年卒）
函館開港読ませていただきました。函館の歴史の奥深さに感じ入りました。ありがとうございます。

◇岩切　省三（69期・昭42年卒）
お世話の程有難うございます。

◇近藤千寿子（69期・昭42年卒）
いつもお世話様です。

◇園　繭子（69期・昭42年卒）
東京白楊だよりいつも楽しみにしております。関西の発展は経済界の動向に左右されているように思えてなりません。支店・支社・支部どんどん進出してきて下さい。会員増も期待できるでしょう。

◇山本　正子（70期・昭43年卒）
平成15年8月20日をもち井槌病院を退職いたしました。

◇川添　栄治（71期・昭44年卒）
71期同窓会の様子を見て、私も是非参加をと思うのですが、なかなか思うようにいきません。皆さんによろしくお伝え下さい。

◇川村　哲雄（71期・昭44年卒）
平成15年度第71期同期会を6月28日（土）午後4時から銀座8丁目「盛焔」で開催しました。参加者は私を含め、2次会からの参加も合わせて総勢38人でした。2次会は69期同期会との合同開催で、71期ら33名が参加、71期のみの3次会にも21名が残り、延々7時間余の大宴会となりました。

◇小島　英樹（71期・昭44年卒）
9月で帰郷します。会報や写真を送って戴き有難うございました。

◇佐藤　昭治（71期・昭44年卒）
会費を学生会費、勤労者会費、年金受給者会費と分けることを提案したい。

◇村本　広康（71期・昭44年卒）
いつも通信楽しみに見ています。来年の同期会は出席しようと思ってます。皆様によろしく。

◇梶原　保男（72期・昭45年卒）
同窓会行けなくてすみません。

◇菊池　佳裕（72期・昭45年卒）
ホームページを在校生に丸投げするのではなく、OBにその関係者がおれば委託したらいかがでしょうか。

◇吉田　眞紀（72期・昭45年卒）
おさそいをありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

◇五十嵐　力（74期・昭47年卒）
東京白楊だよりの26号中、洞爺丸の記事は大変読みごたえがありました。出典を読んで見ようと思います。本年8月15日より自宅近くで内科、小児科、循環器科のクリニックを開業しました。治療時間平日9時～19時、日祝日9時～19時、急患24時間受付としています。要するに24時間365日診療するわけです。循環器疾患、救急医療に自信があります。御利用下さい。

◇柴田　君惠（77期・昭50年卒）
名古屋なのでなかなか参加できませんが、白楊だよりを送っていただきありがとうございました。

◇鈴木　達哉（77期・昭50年卒）
東京白楊だよりを毎年送っていただいています。会にはなかなか参加できず申し訳ありません。

◇西島　弘子（77期・昭50年卒）
いつもお世話になっております。なつかしく会報を読ませてもらっています。

◇本塚　敦子（79期・昭52年卒）
なかなか出席できませんが、そのうち是非一度同窓会に参加したいと思っております。

◇清水　真（82期・昭55年卒）
独協大学法学部に転任致しました。平成16年4月には新設の法科大学院（law school）教授に就任する予定です。既に文部科学省の教授審査にも合格しました。また平成16年5月には日本刑法学会で刑事弁護についての報告をする予定です。

◇渡部　利文（83期・昭56年卒）
今年4月に九州より転勤して参りました。同窓会には是非出席したいと思っております。

◇関村　恒世（85期・昭58年卒）
来年は「不惑」です。事務局の皆様いつも本当にありがとうございます。

評議員会報告

平成16年度の理事会兼評議委員会は各期委員34名の出席を得て4月26日（月）に開催された。

冒頭、金子支部長より「会費の納入が800人を割り、縮小傾向にある。企画運営委員会を設置、種々の検討を重ねている。一年後には一歩抜きんでた同窓会としたい」との挨拶があった。

次に各担当より、前年度事業報告及び今年度の事業計画の提案説明があった。

(1)平成15年度事業報告（事務局加納理事）

(2)平成15年度収支決算案（片瀬会計担当理事）

(3)平成16年度事業計画案（石月副支部長他）

①大会②会報③HP④会員管理名簿

(4)平成16年度予算案（片瀬会計担当理事）

また特に支部運営の基本方針として次の提案がされ了承された。

一：明るく楽しく、活力と魅力のある同窓会にしよう

一：運営組織の最構築を図り合理的運営を図ろう

一：時代の流れに沿った対応と展開をしよう

一：若年層を含む会員数並びに参加者の増強を図ろう

具体的展開として

①白楊ヶ丘同窓会東京支部の名簿整備と作成発行

②白楊ヶ丘同窓会東京支部のホームページの再構築と活性化・有効活用

③運営組織の再構築と若手登用

④特にパソコン活用のための体制整備

パソコンというツールを有効活用し会員相互の、情報の共有化、コミュニケーションの場としてのパソコン活用を促進する。

最後に承認の事業計画に対し、支部長より支援要請があり審議を終了した。議案審議の後、会費制で懇親会を開催。午後9時散会した。出席者34名。

（理事　木戸正文（68期）記）

東京支部平成15年収支実績および平成16年度予算

平成16年4月1日から平成17年3月31日まで

収入の部	16年度予算	15年度実績
年会費収入	2,500,000	2,353,000
寄付金収入	120,000	120,000
利息収入	20,000	24,633
大会収入	1,500,000	1,400,000
雑収入	0	0
計	\4,140,000	\3,897,633

支出の部	16年度予算	15年度実績
【事業費】		
会報印刷費	460,000	504,000
会報送料	333,000	361,636
会報諸費	7,000	6,900
大会費	1,300,000	1,410,150
大会諸費	380,000	493,600
大会準備費	0	0
インターネット関連費用	184,000	19,908
事業費　計	2,664,000	2,796,194
【運営費】		
消耗品費	183,000	491,946
印刷費	180,000	220,500
通信運搬費	242,000	286,983
会合会議費	170,000	67,021
理事会費	0	142,600
評議員会費	70,000	68,960
本部派遣費	200,000	323,660
交際費	130,000	145,000
事務所諸費	300,000	300,000
会費払込料	50,000	51,110
雑費	50,000	0
運営費　計	1,575,000	2,097,780
支出の部　合計	4,239,000	4,893,974
差引収支残	△99,000	△996,341

交流いろいろ…同窓生著作紹介・趣味の会・函館巴会・ポプラ会…

不出世の名人木村義雄の思い出から、戦後の黄金時代を築いた大山康晴、升田幸三との名勝負の数かず、ライバル山田道美、内藤國雄、加藤一二三との激闘、後を追ってくる中原誠、米長邦雄を迎え撃つ戦い、そして弟子の羽生善治の活躍まで。

この50年の将棋界を語るに最もふさわしい著者が自らの半生と、棋士たちの勝負にかけた人間味あふれる生き方を、身近で見聞したエピソードを交えてつづる。

二上　達也

1932年函館生まれ。50年、18歳で故渡辺東一名誉九段門。73年、九段昇段。タイトル戦登場26回。タイトル獲得は王将1期、棋聖4期。A級通算27期。90年引退。89年より14年間日本将棋連盟会長をつとめた。92年紫綬褒章、02年勲4等旭日小綬章受章。

読後感想：この本から3つのテーマを読む。(1) 棋士としての勝負の『あや』の世界。微妙な心理戦の中で勝負を競う場面は迫力満点。(2) リーダーの資質と在り方。連盟会長として14年間は人格の二上氏ならではの存在感である。(3)『人を育てる』事の意義。育て方の方法論よりも人間としての対話がどれだけ出来るかにあると感じた。

山歩きのお誘い

森林浴、新緑、紅葉、草木の香り、太陽を浴びて、山の魅力を一緒に楽しみませんか。柔らかい土を踏みしめて歩くと、仕事＆都会の雑念の疲れから、心身ともに休養がとれ、若さを保つ源泉となります。
どなたでも参加できる日帰り低山コース主体といたします(数回／年)。山歩き初めての方、大歓迎ですので、興味ある方は是非ご連絡ください。お待ちしております。

連絡先：石月言成（61期）
TEL.090-2741-9336
FAX.045-774-4678
[e-mail]i8195@abox5.so-net.ne.jp

「ポプラ会」・「巴会」報告

白楊ケ丘同窓会東京支部ゴルフ会「第21回・22回ポプラ会」報告

理事　65期・菅原大作（65期）

白楊ケ丘同窓会東京支部会員のゴルフ愛好者のコンペ「ポプラ会」は、今年で11年を経過したが、本年度も11月と5月の2回開催された。

第21回は、平成15年11月14日、埼玉県の浦和ゴルフ倶楽部で、6組24人が参加して行われた。この日は多少風があったものの、暖かな小春日和の中で熱戦が行われた。

成績は、前回15位の屈辱を期すために、〃晴れ男〃の友人を誘うと同時に、前回のスコアカードを持ってプレーを続けた水江彰一氏（60期）が、43、41でシニアベスグロも獲得して初優勝した。第2位は57期・山崎陽三氏、第3位はポプラ会会長の52期・二上達也氏。女性のベスグロは、札幌から参加された64期・河原木和子さんが54、43で獲得された。

第22回は、平成16年5月14日、浦和ゴルフ倶楽部で29人が参加して、前々日までの強風、前日の豪雨の影響もなく快晴微風の絶好のコンディションの下で行われた。

成績は、60期・佐野幸雄氏が優勝。2位はテレビ・水戸黄門・格さん役・合田雅史氏の父の62期・合田京二氏、3位は同じ62期・大味勲氏。なお、ベスグロは、函館から参加の坊吉太郎氏の39、45で、女性ベスグロは、60期・松田栄美子さんが48、52で獲得された。

ポプラ会では、優勝者には「二上賞」としてプロ棋士が対局中に使用する扇子に二上氏が揮毫したものが贈られているが、21回は優勝の水江氏と準優勝の山崎氏に、22回は優勝の佐野氏とベスグロの坊氏にそれぞれ贈られた。また、坊氏寄贈の野球部創部百周年記念ボールが21回は52期・瀬田松吉昭氏、22回は名本庸一氏にそれぞれ贈られた。

なお、次回（23回）のポプラ会は、11月12日（金）の予定です。コンペの案内状ご希望の方は、下記までご連絡ください。

第八回　三校対抗函館巴会

ポプラ会とは別に、平成9年より行われている函館西、東両校同窓会支部と行っている「函館巴会」コンペが平成16年4月15日茨城県の豊里ゴルフクラブで、西高13人、東高12人、中部13人が参加して東高の幹事で行われた。

成績は、個人が東の新田耕也氏、団体は中部が前年に引き続き連覇した。中でも片瀬裕巳氏（80期）が準優勝、小林嘉則氏（63期）が3位、武田有弘氏（57期）が41、40でベスグロを獲得して7位に入賞してポイントを稼いで団体優勝に貢献した。

平成17年第9回は西高が幹事当番校であるが、早くも日程・場所が決定。

4月14日（木）デイスターGC千葉県・茂原駅からクラブバス20分。団体3連覇を果す為に我こそはと思う方の参加をお待ちしております。

※ポプラ会申込み先
FAX：03—3424—6854
63期・小林嘉則　宛

第28回親睦大会案内

2004年10月23日（土）午後４時30分～

講演会：午後5時00分～午後5時45分　懇親会：午後6時00分～

ミニ物産展：午後4時30分～午後8時30分

今年の白楊ケ丘同窓会は、評議員の皆様へのアンケート調査結果から、今、何が同窓会に求められているかの要望をお聞きし、関係者のご協力のもとで、今回イベント担当期である61期のメンバーにより各種イベントを企画いたしました。是非当日を楽しみ戴きたくご期待願います。

①白楊魂の確認と伝承②世代を超えた交友を深める③相互啓発による生きがいの向上④明るく、楽しく、活力と魅力ある社会構築への貢献

講演会

テーマ「私の経営観、人生観」

佐々木住明氏（昭和34年卒・61期）

元㈱花王　副社長

演者のこれまでの企業経営活動に携った海外駐在も含めた多くの体験から今後の日本人の生き方について問題提起や、高度情報化社会がもたらす大きな変化の渦中にあって「企業とは何か？」、「仕事とは何だろう？」、そして「家庭とは？」。今こそ原点に立ち返って見直し、本気で考えて見ることの意義とその重要性についての私見を述べ、皆さんと一緒に考えて見たいと思います。

（演者の信条は決して逃げず誠心誠意忍耐をもって正面から取り組むことです）

ジャズ演奏

本格的なジャズの生演奏と、北海道出身の演奏者並びに美人ジャズボーカリストの唄を楽しみながら、同窓生との語らいに花を咲かせて下さい。

スローな曲、ＢＧＭ風な曲、軽快な曲、そして映画音楽（主題曲）、ボサノバなどを取り混ぜ、多くの方々が楽しめる構成を考えております。時間に余裕があればリクエストにも1～2曲対応出来ます。

ミニ函館物産展

午後4時30分～午後8時30分

親睦大会受付横に、ふるさと函館の味コーナーを設けました。皆様のお買い上げをお待ちしております。当日、函館より海産物を主体に直行便にて会場に配送されます。当日は直売いたしますが、数量に限りがありますので、是非、予約していただくと確実に購入ができます。ご案内と販売内容並びに予約申し込み用紙は別紙同封しましたので、ＦＡＸにて申し込みください。お宅への持ち帰りも大丈夫です。

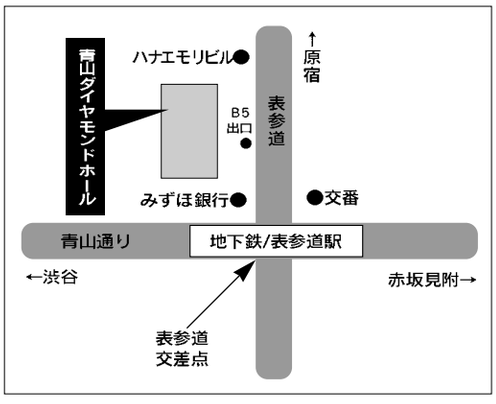
予約受付締切日　10月5日

直売日時　10月23日（土）午後4時30分～8時30分

同期＆世代間交流の場

折角の機会ですので、親睦会を通じて、同世代はもちろんのこと、異なる世代間の積極的な交流を深め、多くの刺激と気づきにより、参加の目的が達成されるよう、ご活用ください。

青山ダイヤモンドホール ご案内



◆青山ダイヤモンドホール◆

〒107-0061　東京都港区北青山3-6-8

電話：03-5467-2111

●地下鉄／銀座線・半蔵門線・千代田線表参道駅Ｂ5出口直結

●JR山手線／原宿駅下車・徒歩10分

※駐車場（有料）には限りがございますので、なるべく公共の交通機関をご利用下さい。

―編集後記―

昨年の26号特集に青函連絡船洞爺丸を掲載したところ、興味深く読んだという声をいただきました。今年は事故から50年目を迎えるにあたり今もう一度振り返ってみました。当時を知るものとしては、生涯忘れられないほどの大きな台風と驚きの事故でしたから…。

すでに新聞等の報道でご高承の通り函中51期の早坂茂三氏が亡くなられました。旧制中学最後の気風を持つ豪放磊落の評論家として活躍されておりましたが、近年は函館の活性化の為に尽力されていました。8月21日、同郷の有志による『偲ぶ会』が催され東京支部役員他同窓生が出席し御冥福を祈りました。

昨年3年の任期を終えた杉田博子氏から金子新支部長に引継がれて最初の会報になり、会員の皆様によりいっそうの御協力と御賛同をいただく為に新たなメッセージを掲載しております。まだ同期会を開いていない若い期のためにも名簿の充実をはかりＨＰを活用してのインターネットで交流をしていくプランを御理解戴けたらと役員一同考えております。今後の同窓会の活力ある発展の為に皆様の御意見をお寄せ下さい。

東京白楊だより27号

●発　行
白楊ケ丘同窓会東京支部

●発 行 人
金子　公彦（61期）

●編集責任
小林　嘉則（63期）

●発 行 日
平成16年9月1日

【東京事務所】
〒160－0022
東京都新宿区新宿1－13－8－302
TEL：03－3352－6281
FAX：03－3341－5048